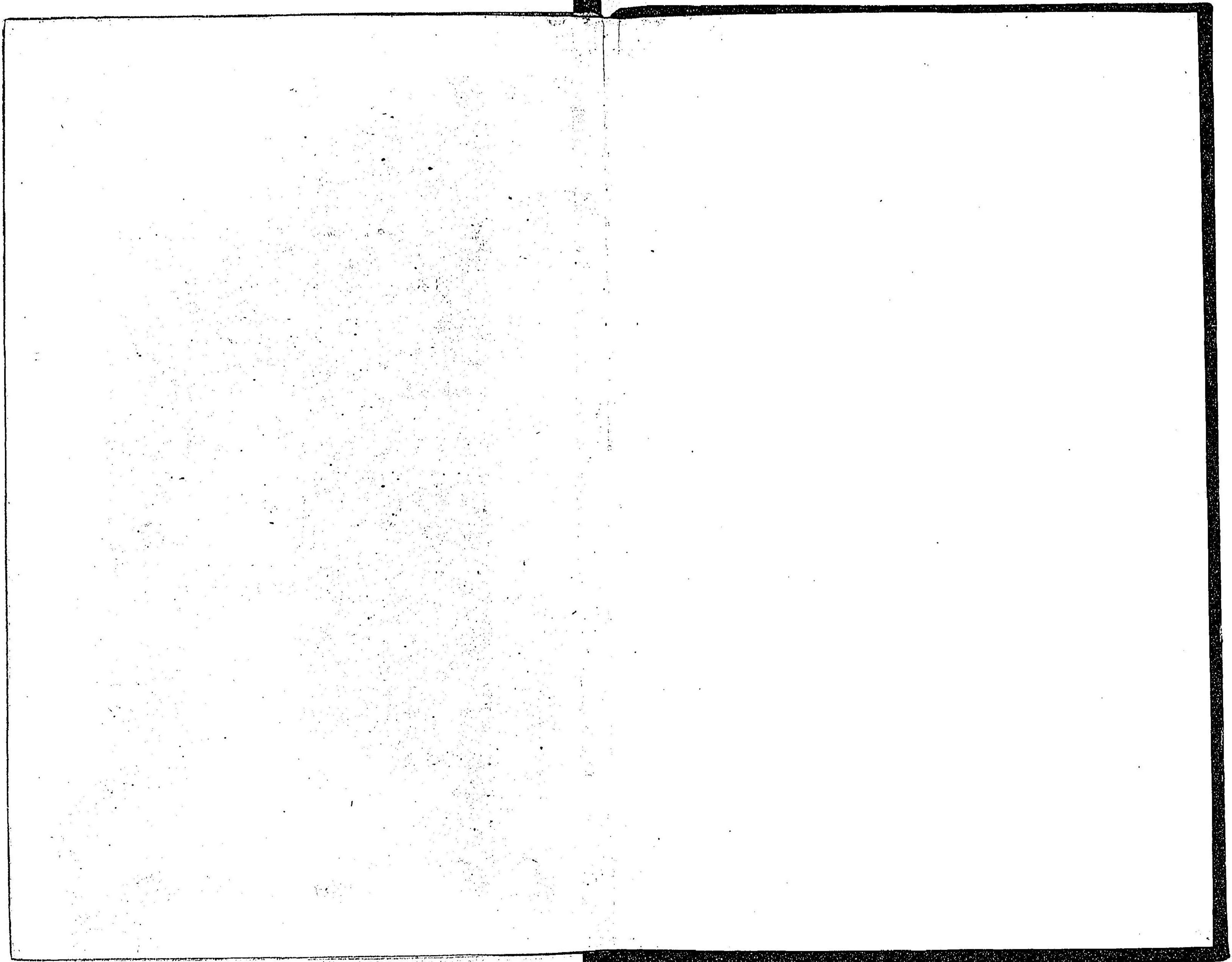


40

170

三重縣
多喜郡
椎筭製造法



40170

三重縣 多喜郡 椎茸製造法

○第一章 樹種

椎茸ヲ發生セシムル樹種ハ大概左ノ如シ

こなら(又はほそ) おほなら、まらしで、あかしで、まらかし、まい、くり、うばめかし、あかし、おほかし、くぬぎ、さかき、いぬぶな、

然レモ當地方ニ於テ椎茸製造者ノ通常使用スルモノハこなら、おほな、

かしでニシテ間々、まらかし及まいヲ用フルノミ而シテ此六者中元ヨリ椎茸ヲ發生

シムルニ難易ノ別アリ又椎茸發生量ニ多少アリ即チ椎茸ヲ寄生セシムルニ容易

ナル順序

第一 こなら、おほなら、

第二 まらかし、

第三 まらしで、

第四 あかしで、まい、ナリ

注意 いぬしで(又はまじで、おほしで、おぼしでト云フ)ハ決シテ椎茸ヲ發生スル



林學士 佐藤 銀五郎

ナシト云フ

又椎茸カ愈々寄生シタル時ニ於テ其多量ニ發生スルモノハ志らむでナリト雖モ椎茸品位ノ最良ナルモノハ志イトシ又大ナル椎茸ヲ生スルモノハ志らむ及志イトス

○第二章 椎茸木ノ撰定

前章述フル所ニヨリテ椎茸發生ノ樹種ヲ知ルヲ得タリト雖モ此等ノ樹種必スシモ常ニ椎茸ヲ發生セシムルモノニアラス其生長ノ狀態幹部ノ大小及年齡等總テ適切ナラサルニ於テハ如何ニ老練家ヲシテ之カ製造事業ニ從事セシムルモ椎茸發生セサルヲ明カナリ是レ蓋シ椎茸木撰定ノ必要ナル所以ナリ

然ラハ如何ニ生長シタル樹木ヲ宜シトスルヤ曰ク

南面ノ林地ニ生シタルモノヲ最良トシ次ハ西面次ハ東面ニシテ北面ノ林地ニ生シタルモノニハ往々椎茸發生セサルコトアリ是レ蓋シ生長期間陽光ヲ受クルノ量異ナルカ爲メ樹體內ニ含蓄セル各種ノ物質量ニ多少アリ從テ椎茸ノ養分ニ差異アレハナリ此理ニヨリ南面ノ草苧山等ニ孤立セルモノニハ椎茸發生

スルヲ容易ニシテ且其量多シト云フ之ニ反シテ密林内ノ下木ニハ椎茸發生セサルヲ常トス故ニ椎茸製造用ノ樹林ヲ造ラント欲セハ必ス林相ヲシテ密ニ失セシム可ラス

可ナリ嶮岨地ニシテ水引キ宜シク乾燥セル林地ニ生スルモノヲ良トシ必スシモ地味豊饒ナルヲ要セス何トナレハ椎茸木ハ用材ト其目的反シカ故ニ生長力旺盛ニシテ樹幹甚シク伸長シ年輪濶大ニシテ年齡ニ比シ樹幹割合ニ太キモノヨリモ寧ろ徐々ニ生長シテ年齡ニ比シ樹幹割合ニ小ニ材質密ニシテ屈曲セル位ノモノヲ貴ヘハナリ

又椎茸木ノ大小及年齡ハ如何曰ク

こならニアリテハ幹ノ目通周圍凡ソ八寸以上ノモノ能ク椎茸ヲ發生シ得ルト雖モ周圍二尺五六寸乃至三尺位ノモノヲ以テ最良トシ年齡ヨリ論スレハ二十四五年生ノモノヲ最良トス故ニ宜シク年齡ト樹幹ノ大小トニ注意スヘシ即チ樹幹假令大ナルモ外皮尙平滑ニシテ破レ目ナキモノ(俗ニ之ヲ櫻肌ト云フ)ハ未タ年齡若キニヨリ椎茸發生スルコト稀ニシテ間々生スルコトアルモ發生期(發

生期トハ椎茸ノ生シ始メタル年ヨリ最早生セサルニ至ル迄ノ期間ヲ云フ短カク之ニ反シテ樹幹小ナルモ相當ノ年齢ヲ經過シタルモノハ能ク椎茸發生スレハナリ

志でニアリテハ寧ロ老大ナルヲ貴フト雖モ目通周圍三四尺位ノモノヲ最良トシ又年齢三十二三年生ノモノヲ最良トス志で樹ノ幹ニシテ相當ノ年齢ヲ經過シタルモノニ山刀ヲ以テ切り目ヲ入ル、片ハ「ビチ々々」ト鳴リテ局部ノ外皮剝奪シ肉色ノ眞皮ヲ現出ス如此キモノハ椎茸ノ發生最モ宜シ
志らかし及しいニ在テハ老大ナルニ從ヒ益々結果宜シク幼小ナルモノハ惡シ而シテ志らかしノ最良ナルハ目通周圍五六尺位ノモノナリト云フ

○第三章 伐木時期

椎茸製造事業ニ最モ必要ナルハ立樹ノ伐採期節ニシテ之ヲきり志ゆんト稱ス蓋シ椎茸ノ生スルト否トハ此きり志ゆんニ起因スルヲ以テ隨ツテ該製造事業ニ損益如何ヲ釀セハナリ此きり志ゆんハ素ヨリ樹木ノ或ル年齢ニ到達シタル後ニ於テ起ルハ勿論ナリト雖モ樹幹カ已ニ椎茸ヲ寄生セシメ得ル年齢ニ達シタル以上ハ毎年樹

木カ將サニ一年間ノ生長ヲ終ヘントスル時ニ於テ定マルモノニシテ其時期ニ在テ樹體內ノ水分ト養分トノ割合如何ニ至大ナル關係ヲ有スルカ如キヲ以テ生長ノ状態ヲ異ニセル各樹ノ伐採期節自ラ異ナリ今左ニ重要ナル樹種ニ就キ從來當地方ニ於テ慣用セル伐採期節撰定方法ヲ記サン

第一 こなら及ねほなら

(一) 時候 舊九月ノ節句ニ菊花咲ク年ヲ規則正シキ年トシ此年ニ於テハ秋ノ土用明ケ前五日目位ヨリ土用後十日頃迄即チ前後凡ソ十五日間ニ於テ伐採スルヲ良トス之ヲきり志ゆんト稱ス然レモ眞ノきり志ゆんハ其間中央ノ七八日間トス
若シ舊九月ノ節句前ニ菊花咲ク年ハ秋ノ土用從テ早ク又菊花遅キハ土用從テ遅シ此等ノ年ヲ不正ノ年ト稱シ其時候如何ニヨリテきり志ゆんニ遲速アルモノナリ

(二) 葉色 前述ノ如ク時候ハ年々異ナルカ故ニ單ニ之ニ據テきり志ゆんヲ定ムルコト頗ル難事ナリ故ニ又葉色ヲ考ヘテ定ムルヲ宜トス即チ伐採セントスル樹木ノ下ニ立チ仰テ樹冠ヲ望ミ全葉カ正ニ固有ノ綠色ヲ變シ其中ノ三分通リハ既ニ黄

色ヲ帶ヒ七分通りハ未タ黄色ヲ帶ヒサルモ透明トナリタルトキハ眞ノきり志ゆんナリ俗ニ之ヲ「葉カ照ル」ト云フ

(三) 甘汁 山刀ヲ以テ樹幹ニ切り目ヲ加フルトキハ「ズー」ト云フ音ヲ生シ且其切り口ヨリ汁液流出ス之ヲ嘗ムルキハ甘クシテ毫モ苦味ナシ是レ眞ノきり志ゆんニ達セル證ナリト云フモノアリト雖モ秋期ニ至レハ多數ノ潤葉樹幹ハ山刀ノ切り目ヲ受クレハ大概「ズー」ト云フ音ヲ發シテ瘡口局部ノ水分下降スルカ故ニ單ニ此音ノミヲ以テきり志ゆん如何ヲ判定スル能ハス又こなら及おほなちハ切り口ヨリ流出スル汁液少量ナルヲ以テ之ニ據リテきり志ゆんヲ確定スルコト難シト雖モ亦此法ヲ試ミルヲ良トス

(四) 根株伐採面ノ狀況 伐採後二三日ヲ經テ根株ヲ驗シ其伐採面悉ク溢ヲ以テ被ハレ乾燥シ居レハ則チ樹體內ニ於テ正ニ水分吸上作用ヲ停止シタルノ後伐採シタル證ニシテ俗ニ之ヲ「下ゲ水」ト云フ是レ眞ノきり志ゆんナリ

若シ之ニ反シテ伐採面ニ水分溢出シ居レハ則チ樹體內ノ水分尙上昇シツ、アルノ時ニ於テ伐採セルモノニシテ俗ニ之ヲ「上ゲ水」ト云フ即チ未タきり志ゆんニ到

達セサルノ證ナリ

(五) 樹幹ノ硬固 眞ノきり志ゆんニ於テハ樹液少キカ爲メ他ノ時ニ比スレハ樹幹頗ル固クシテ斧ヲ以テ之ヲ伐ルニ其木片^{コッパ}白色ナリト雖モ既ニきり志ゆんヲ經過シタルキハ柔カニシテ且木片褐色^{飴色}ヲ呈ス

(六) 伐採後ニ於ケル葉ノ狀態 きり志ゆんニ伐採シタルモノハ二三日ヲ經テ全葉悉ク暗褐色ニ變シ甚タシク卷縮スルコトナク且容易ニ落葉スルコトナシト雖モきり志ゆん前ニ伐採シタルモノハ二三日ヲ經テ全葉中褐色トナルモノアリ、黑色ニ變スルモノアリ或ハ未タ綠色ヲ帶フルモノアリテ一様ナラス且卷縮スルコト甚シク日子ヲ經過スルニ從ヒ自然ニ又ハ風ノ爲ニ大概脱落シこなし(後章ニ詳ナリ)ノ時期ニ至レハ又タ一葉ヲ留メサルヲ常トス是レ蓋シきり志ゆんヨリ早キニ於テハ樹體尙生長作用ヲ行ヒ各葉亦同化作用ヲ營ミツ、アルヲ以テ未タ其内部ニ葉綠及養液ヲ含有セルニヨリ硬性ニ乏シク樹幹伐採セラレテ忽チ腐敗ニ傾ク爲メナルヘシ

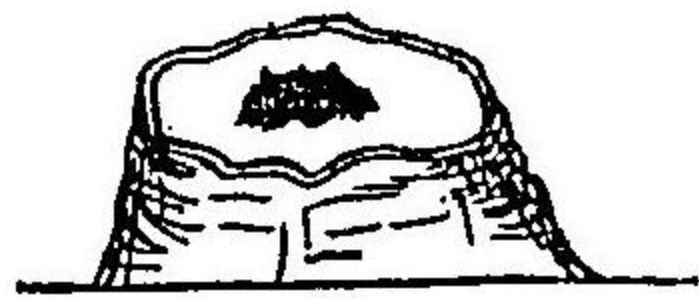
(七) 皮部ト材部トノ密着度 伐木ニ際シテ樹皮容易ニ剝奪スルトキハ其樹木ハ尙生

長作用ヲ營ミ亞皮部層ハ尙働キツ、アルカ故ニ未タ眞ノきり志ゆんニ到達セス
ト雖皮部材部ト相密着シテ容易ニ剝奪セサルニ至レハ既ニ生長作用ヲ休止シ水
分ノ上昇ヲ止メタルモノナルカ故ニ此時ヲ以テ眞ノきり志ゆんトス此理ニヨリ
樹幹ノ陽光ニ對スル半側ハ既ニ水分ノ上昇ヲ止メテ皮部剝奪スルコトナキモ被
陰ナル他側ハ未タ水分多キカ爲メニ樹皮剝奪シ得ル樹木ヲ伐採スル時ハ後半
ハ未タ眞ノきり志ゆんニ達セサルタメ椎茸發生スルコトナク他ノ半面ニノミ椎
茸ノ發生スルヲ見ルコト往々是レアリ

第二 志で

- (一) 時候 ならノ條下ニ於テ述ヘタルカ如ク菊花ノ早キヤ否ヤヲ考ヘ規則正シキ年
ニ於テハ秋ノ土用前十日位ヨリ土用入り後二日位迄即チ前後凡ソ十二日間ヲ眞
ノきり志ゆんトスレトモ不正ノ年ニ於テハ預メ確定セサルナリ
- (二) 葉色 前述ノモノニ同シ
- (三) 甘汁 山刀ヲ以テ樹幹ニ切り目ヲ加ヘ「ズ」ト云フ音ヲ發シテ汁液ヲ滴出シ其味
甘クシテ蜜ノ如キトキハ是レ眞ノきり志ゆんナリトニアリテハならニ比スレ

第一 圖



- ハ甘汁ノ流出量遙カニ多キカ故ニ必ス此試驗ヲ行ハサルヘカラス
 - (四) 根株断面ノ狀況 伐木後五日乃至十日位ヲ經過シテ根株ノ伐採面ヲ檢スルニ第
一圖ノ如ク中央部ニ黒色ヲ呈シ(其色恰モ黒砂糖ニ彷彿タリ)外部ハ白
色ニシテ全面乾キ居ルカ又ハ断面一様ニ白色ニシテ乾燥シ居レハ是
レ則チ「下ゲ水」ノ時伐採シタルモノニシテ眞ノきり志ゆんニ適中セル
ナリ若シ之ニ反シテ伐木後一二日ヲ經テ断面ニ水液ノ溢出スルコト
夥シク且三四十日ヲ經過シテ断面悉ク黒色ニ變シ且乾クコトナケレ
ハ是レきり志ゆんニ到達セサルノ前伐採シタルノ證ナリ
 - (五) 樹幹ノ硬固 前述ノモノニ同シク志でニ於テハきり志ゆん中特ニ固キヲ感ス
 - (六) 伐木後ニ於ケル葉ノ狀 前述ノモノニ同シ
 - (七) 皮部ト材部トノ密着度 是亦前述ノモノニ同シ
- 第三 志らかじ
- (一) 時候 寒ノ入りヨリ寒明ケ迄ノ間ニ於テ伐採スルヲ宜トス
 - (二) 葉色 寒ニ至リテ葉色淡薄トナル是レきり志ゆんナリ

(三) 甘汁 きり志ゆんニ至リ山刀ヲ以テ幹ニ切り目ヲ入ルレハ甘汁流出スルヲ前述
フルカ如シ

第四 志い

(一) 時候 志らかじト同時期ニ伐ルヲ宜トスト云フモノアレトモ舊十月中ヲ好期ト
ス

(二) 葉色 舊十月ニ至リ種實成熟スルヲ期トシテ葉色淡薄トナル是レ眞ノきり志ゆ
んナリ

(三) 甘汁 前述ノモノニ同シ
爰ニ伐木時期一般ニ就テ注意ヲ要スヘキコトアリ曰ク

(一) 總テ何樹ニ係ラス多量ニ種實ヲ生スル年(俗ニ云フ實成リ年)ニ伐木スルトキハ
椎茸ノ發生スルコト少ク其前年ニ伐木シタルモノハ結果良好ナリ

(二) 氣候寒冷ナル處ハ温暖ナル處ニ比スレハ早く伐木スヘク山頂ノモノハ山麓ノ
モノヨリ早く伐採スヘシ

(三) 地層淺キ岩石地ニ生立セルモノハ地味豊饒ナル處ニ生立セルモノヨリモ早く

伐採スヘシ

(四) 老樹ハ幼樹ニ比スレハ早く伐採スヘシ

(五) きり志ゆんニ達セサル前ニ伐採スルニ比スレハ寧ロ之ニ遅レタルヲ可ナリト
ス例之ハ全葉中ノ六分既ニ脱落シテ漸ク四分位殘存セルトキハ伐採スルモ椎
茸能ク發生スルカ如シ然レトモ此ノ如キハ單ニ其幹脚數尺ノ部分ニ止マリ其
他部ニ發生セサルカ故ニ蓋シ損失ヲ免レサルナリ

(六) 同一ノ林地ニ生スルモノト雖モ伐木期節ニ多少ノ差アルカ故ニ多數ノ椎茸木
ヲ伐採セントスルトキハ全林ヲ通シ一側ヨリ他側ニ向ツテ先ツ眞ノきり志ゆ
んニ到達シタルモノ、ミヲ伐採スヘシ然ルトキハ其間ニ伐リ殘サレタルモノ
漸次きり志ゆんニ達スルカ故ニ再ヒ一側ヨリ他側ニ向ツテ伐採スルカ如ク常
ニ循環法ヲ用フルヲ利トス

(七) 土俗云フ伐木期節中ニ在テハ月夜ノ時ヨリモ暗夜ノ時ニ於テ伐採スルヲ良ト
シ殊ニ志らかじ并志いニアリテハ一層暗夜ニ伐リ當テル様注意スヘシ然ルト
キハ椎茸能ク發生スト此一事ニ至テハ予未タ眞偽ヲ慥カムルコト能ハスト雖

圖 三 第

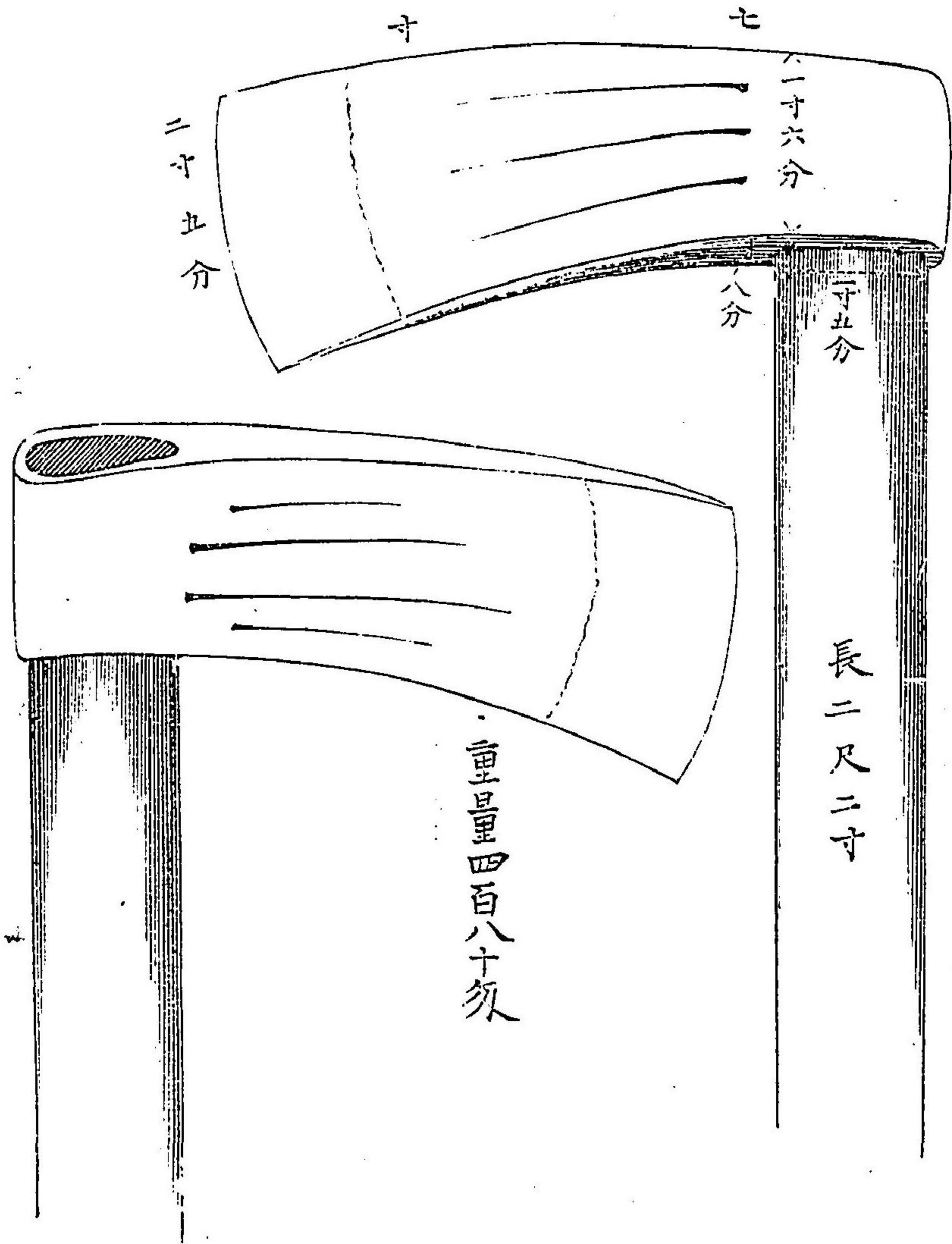
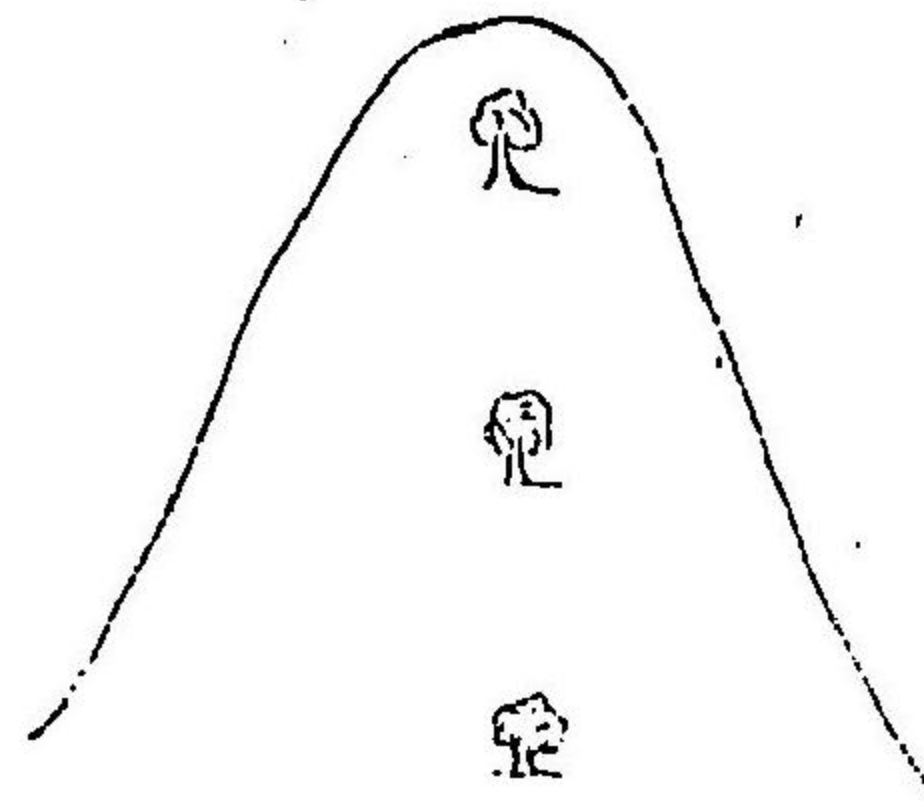


圖 二 第

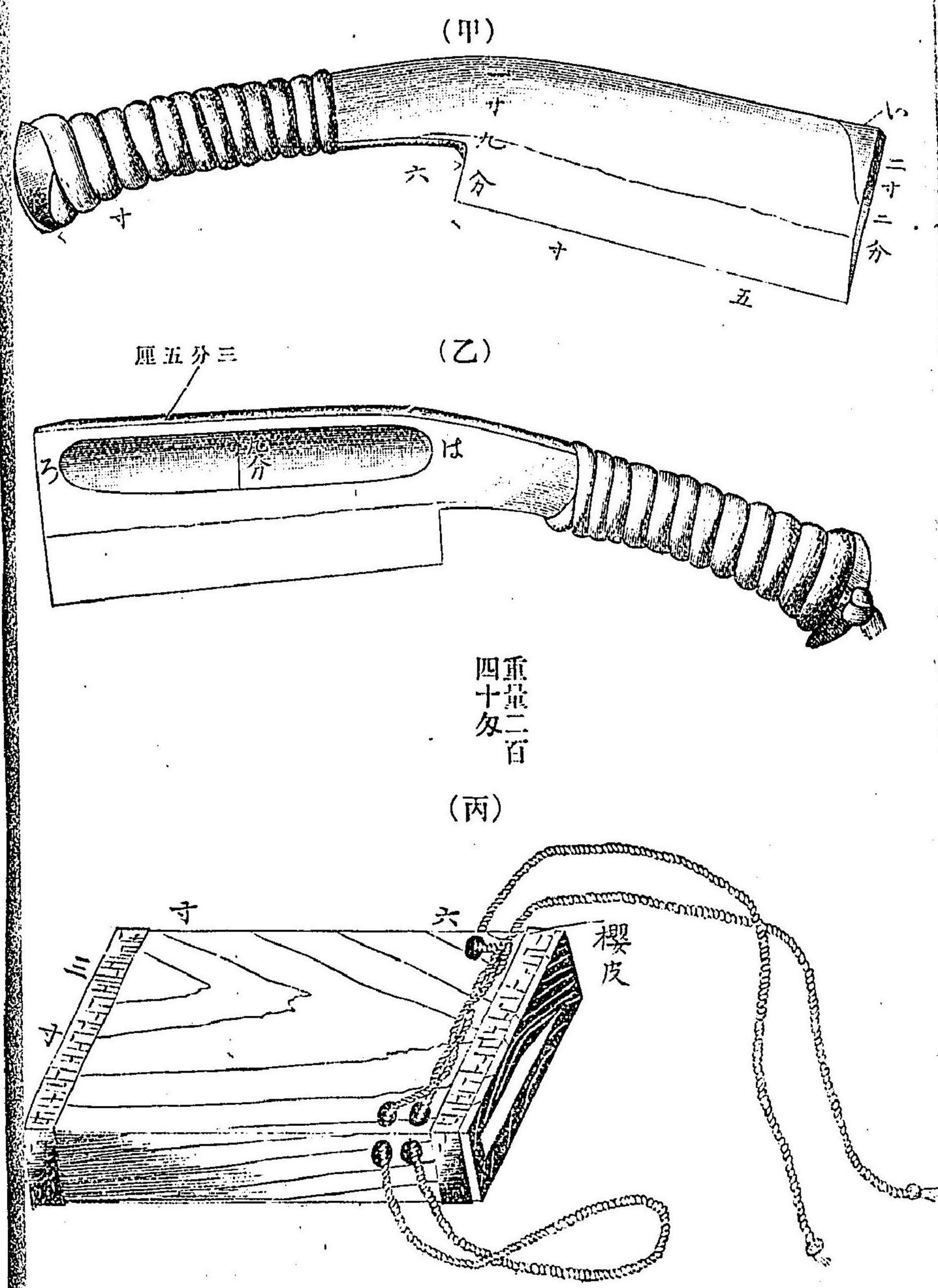


モ月光ト樹木トノ關係ニ至リテハ亦宜シク研究スヘキ一事タルヘシ
 (八)雨天并雨天ノ前半日ニハ必ス伐木スヘカラス又伐木スルモ害ナシト云フモノ
 アレトモ得失未タ明ナラス

(九)伐木期節ヲ定ムルハ椎茸製造事業中最モ難事ナルカ故ニ多數ノ椎茸木生立セ
 ル一山ヲ伐採セントスルニ當リテハ預メ伐期ノ四年前ニ於
 テきり志ゆんと思フトキ第二圖ノ如ク山頂ト山腹ト山麓ト
 ニ於テ一二本宛ノ標準木ヲ伐採シ各樹ニ就テ明細ニ葉色甘
 汁根株断面ノ狀況等ヲ詳記シ置キ爾後四年目ニ至リテ何レ
 ノ標準木ニ最モ多ク椎茸發生スルヤヲ檢スヘシ例之ハ山腹
 ノ標準木最モ結果宜シケレハ是レ眞ノきり志ゆんニ於テ伐
 採シタル證ナルカ故ニ其葉色甘汁及自他ノ徴候ヲ模範トシ
 テ該山ノ伐木期節ヲ判定スヘシ此試驗ハ自己ノ經驗ナキ地方ニ於テ椎茸製造
 事業ヲ營ムニ最モ必要ナリトス

○第四章 伐木法 (椎茸木ヲ伐採スルヲ土俗ぼたきリト稱ス蓋シ
 ぼたトハ椎茸製造木ト云フ意味ナルカ如シ)

圖 四 第



總テ椎茸木ニ就テ最モ必要ナル部分ハ樹皮亞皮部層及邊材ニシテ心材ハ殆ント椎茸發生ニ關係ナキカ如シ故ニ之ヲ伐採スルニ當リテハ用材伐木法ト異ニシテ力メテ皮部ヲ大切ニシ外皮剝奪セサル様充分注意スヘシ心材ハ少シ位割裂スルモ椎茸發生ニ有害ナルヲ見ス何トナレハ心材腐朽セルモノト雖モ能ク椎茸發生スルノミナラス老大ナル樹木ニ至リテハ心材腐朽セル方寧ロ輕クシテ取扱ニ便ナルノ利アリト云フ位ナレハナリ

伐木スルニハ可成的地面ニ接近セル部分ヨリスヘシ即チ力メテ伐リ株ヲ低クスヘシ是レ椎茸ハ幹脚ニ近クニ從ヒ益々多量ニ發生スルモノニシテ俗ニ梢一尺ヨリモ元三寸ガヨシト云フ位ナレハナリ然レトモ志ハ他ノ樹種ト異ニシテ伐採シタル幹部ニ椎茸發生スレハ其根株ニモ亦椎茸發生スルモノナルガ故ニ此樹種ニ限リ伐リ易キ所ヨリ伐採シテ其根株若シ高ケレハ之レニ刻ミヲ入レ置クヘシ然ルトキハ此部分ニモ椎茸發生スルニヨリ決シテ損失ナシト云フ

當地方ニ於テハ伐木スルニ總テ斧ヲ用ヒ鋸ヲ使用セス蓋シ斧ハ鋸ニ比スレハ伐採スルニ容易ニシテ且迅速ナレハナリ此斧ハ第三圖ニ示ス如キ形狀ニシテ其大小元

ヨリ不同ナリト雖モ爰ニ圖示セルモノヲ以テ最大トス其價ハ壹圓拾錢内外ニシテ重量百目ニ付貳拾參錢位ナリ

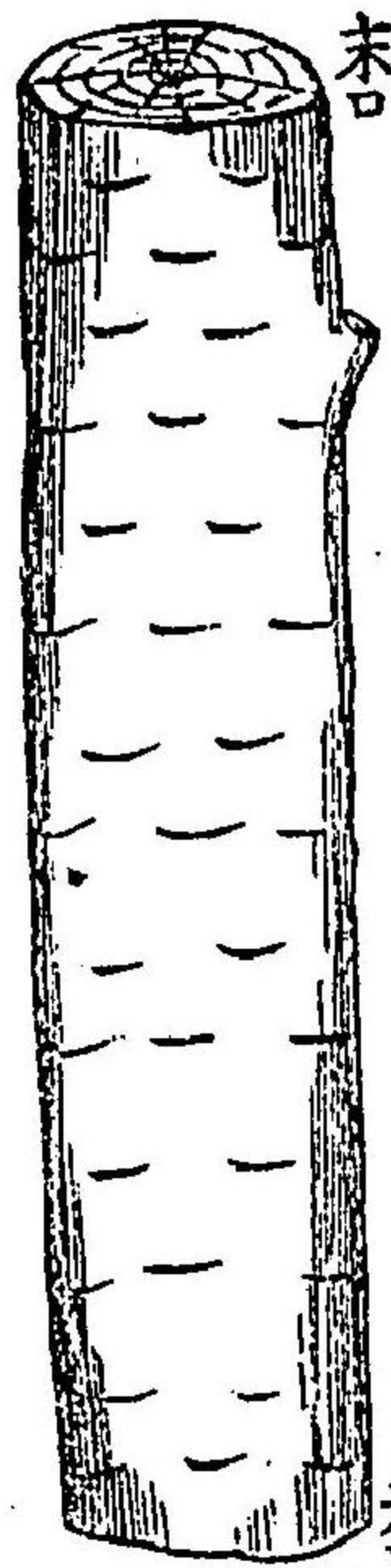
○第五章 刻ミ(又こなし)并寝セ込ミ(又蒸シ込ミ)

第一 こなし并寝ほなら

伐木後凡十五日乃至三十日間若シ其年内ニ刻ミヲ入ル、コト能ハサレハ決シテ翌年舊一月ヲ經過スヘカラスヲ經テ斧ヲ以テ枝ヲ打チ長サ通常五尺位宛ニ横斷ス然シ幹大ナルモノハ短カクシ一人ニテ運ヒ得ル様ニ切ルヘシ又枝ノ大ナルモノハ幹ト同シク五尺位宛ニ切斷スヘシ之ヲぼたト云フ而シテ枝ヲ打ツニハ充分注意シ務メテ幹ノ外皮ヲ傷付ケサル様ニスヘシ斯克一定ノ長ニ切斷シタルぼたニハ第四圖ニ示スカ如キ山刀ヲ用キテ末口ヨリ元口ノ方ヘ向ケぐのめニ切リ目ヲ入ルヘシ其深サ及距離ハぼたノ大小ニヨリテ不同アリト雖モ皮部ト亞皮部層トヲ通シテ邊材迄切リ込ムヲ要シ又ぼたノ大ナルモノハ距離凡ソ四五寸小ナルモノハ凡ソ七八寸ノ距離ヲ以テスヘシ之ヲ刻ミ又こなしト稱ス其狀第五圖ニ示スカ如シ刻ミノ用ハぼたヲシテ充分ニ濕氣ヲ吸收セシメテ早く腐朽セシムルト椎茸ノ種子ヲ受クル

容易ナラシムルトニ在リ爰ニ刻ミニ付テ注意スヘキ一事ハ一列ノ各切リ目間ニ介在スル樹皮ハ之レトぐのめヲナス他

第五圖 末口

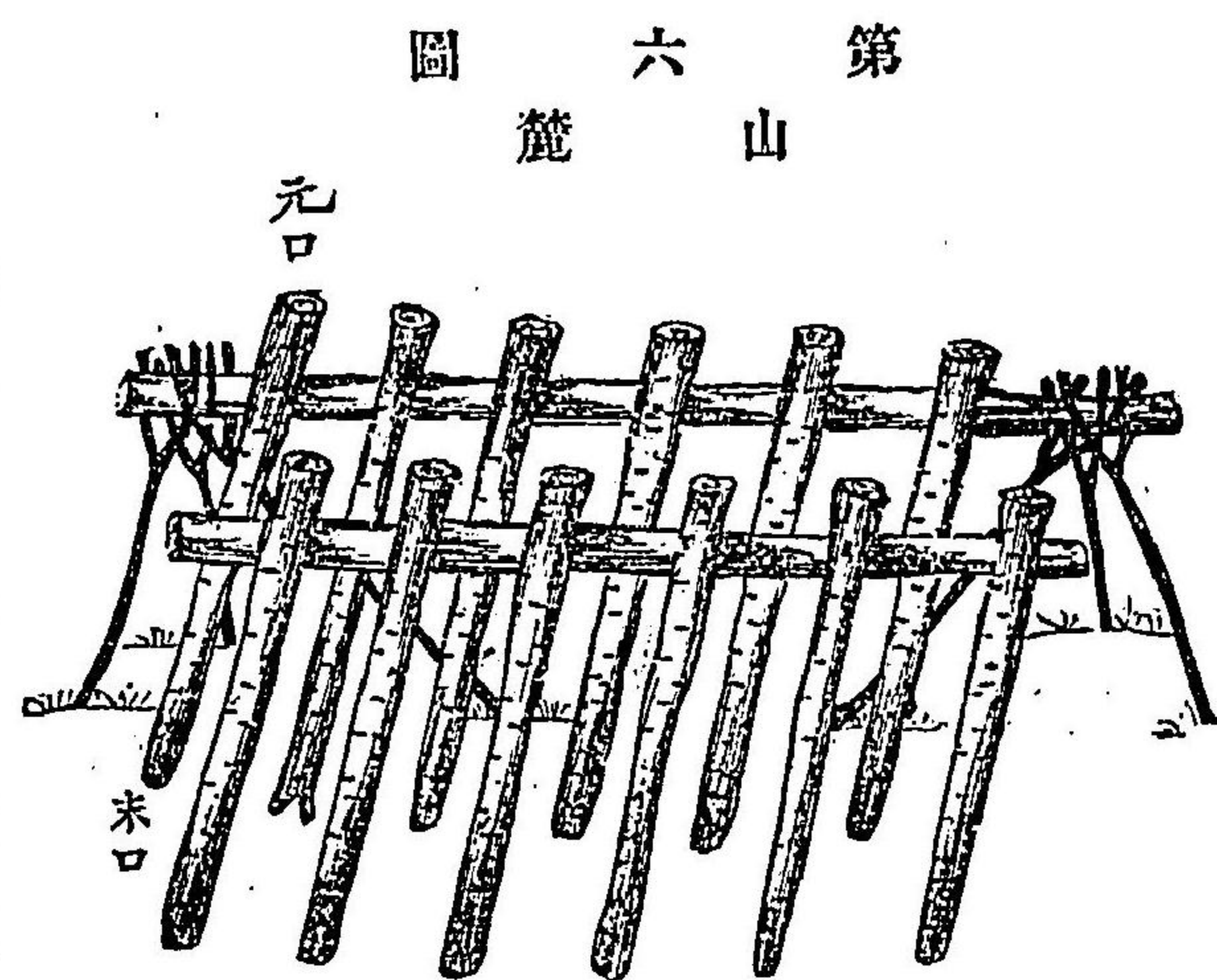


列ノ切リ目ニヨリテ其中央ヨリ切斷セラレ爲メニ甲列ト乙列トノ間ニアル樹皮ハ末口ヨリ元口迄連續シ居ラ

サル様ニスルニアリ

第四圖ニ圖示セル山刀ヲ刻ミ山刀ト稱ス全部鐵製ニシテ柄部ニハ槌ヲ卷キテ握ルニ便ナラシム甲圖ハ表面ヲ示シ其先端ハ部ハ少シク厚サヲ減シ砥クニ際シ木ノ割レ目等ノ中へ挿ミ以テ動かサル様ニスルニ便ナラシメ乙圖ハ裏面ヲ示セルモノニシテろはノ部陷凹セリ是レ及ヲシテ銳利ナラシムルカ爲メナリ丙圖ハ木製ノ鞘ニシテ上下兩端ニ櫻皮ヲ卷ケリ其麻製ノ紐ヲ附着セルハ伐木又ハ刻ミニ際シテ腰部ニ結ヒ付ケ居ルカ爲メナリ而シテ山刀ノ大小重量ハ元ヨリ一定セスト雖モ第四圖ニ示セルモノヲ以テ其最トシ價ハ五拾五錢内外ニシテ重量百目ニ付貳拾參錢位ナリ

上述べ如クシテ刻ミ終レハ直チニ寢セ込ミヲナスヲ要ス其法ニアリ曰ク
第一法 枕寢さし(又枕蒸し) 枕寢さしトハ第六圖ニ示ス如ク先端二又セル小木三



本宛ヲ組ミテまた二箇ヲ造リ之レニ枕木ヲ架シ
其上ニぼたヲ列ヘ次ニ初メノ木枕ヨリ一二尺距
テ、更ニぼたノ上ニ横木ヲ置キ其上ニ復タぼた
ヲ列置スル法ヲ云フ枕木ノ高サハ土地傾斜ノ度
ニヨリテ異ナルハ勿論ナレモ三尺五寸位ヲ以テ
通常トス而シテぼたヲ列ヘルニハ常ニ元口ノ方
ヲ枕木ノ上ニ架シ末口ノ方ヲ地ニ接セシメ前者
ハ後者ニ比シテ常ニ高カラシムヘシ是レ刻ミ目
ヨリ雨水侵入セサルタメナリ而シテ兩者高低ノ
度ハ七寸勾配位ヲ宜シトス然レモ降雪甚シキ地
方ニ於テハ少シク該傾斜度ヲシテ強カラシムル
ヲ要ス然リ而シテぼたノ列ヘ方ハ一列ノモノト他列ノモノト相互々ノめ状ヲナサ

第六圖 山麓

シムヘク且各列ニ於テぼたトぼたトヲシテ密接セシムヘカラス務メテ空氣流通宜
シクシテ雨天ノ節ニハ各ぼたカ盡ク雨水ニ濕サル、様注意スヘシ
此方法ヲ用キテ山腹へ寢セ込ムニハ枕木ヲ寢セ込ミ場ノ最下部ニ架シ漸次山頂ニ
向テぼたヲ列置スヘシ即チぼたノ元口ハ常ニ山麓ニ向ヒテ枕木上ニ架シ末口ハ山
頂ニ向フテ地ニ接スルナリ

(注) 刻ミヲ入ル、ニ當リ往々元口ヨリ末口ニ向テ(即チ前述ノモノト反對ノ方向)
切り込ムモノアリト雖モ斯クノ如ニスレハ寢セ込ムニ當リテ末口ノ方ヲ枕
木ニ架シ元口ヲ地面ニ接セシメサルヘカラス然ルトキハ元口ノ方ニ椎茸發
生セサルコトアルヲ以テ末口ノ方ニ椎茸發生セサルモノニ比スレハ損失甚
シトス是レ蓋シ地面ニ觸接スル部分ハ濕氣夥シキ爲メ甚シク腐敗スルニヨ
リ皮部剝奪シテ椎茸發生セサルコトアレハナリ
此方法ハ多數ノぼたヲ寢セ込ミ得ルカ故ニ寢セ込ミ場所狭キ處ニ最モ適當ナリ
第二法 むかでねさ志(又むかでむし) 此法ハ先端二又セル小木三本ヲ以テまた一
箇ヲ組ムカ又ハ先端二又セル小木ヲ立木ニ立テ掛ケ之レニ第七圖ノ如クぼたヲ相

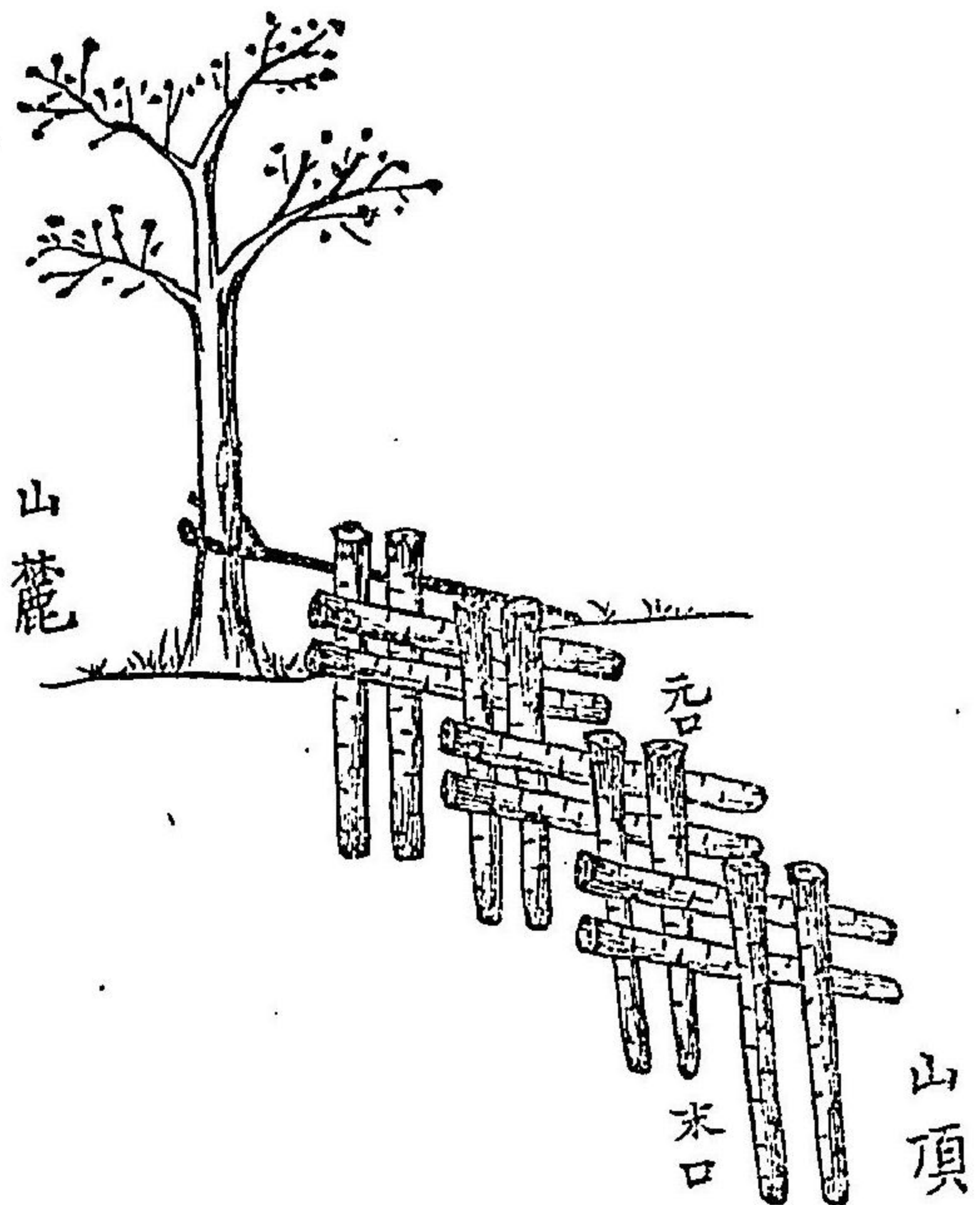
互列置スルモノナルカ故ニぼたトぼたトカ重ナルコト前者ノ如ク甚シカラサル代

リニ廣キ場所ヲ要ス

此法ヲ用キテ山腹ニ寢セ込ムニハ前法ト全シク山麓ヨリ初メ漸次山頂ニ向テぼたヲ列置スヘシ故ニ元口ハ常ニ山麓ニ向ヒ末口ハ山頂ニ向フモノナリ

第一法ト第二法トノ得失 第一法ハ多數ノぼたヲ一ヶ所ニ寢セ込ミ得ルカ故ニ寢セ込ミ場所狭小ナル處ニ適スト雖モぼたノ列置密ニ過クルトキハ空氣ノ流通ヲ阻遏スルニヨリ濕氣多キニ失シ白色ノ微ヲ生シテ椎茸ノ發生ヲ害スルコトアリ第二法ハ之ニ反シテぼたノ重ナリ合フコト少ナキカ故ニ空氣ノ流通宜シク從テ椎茸發生ノ結

第七圖



果宜シト雖モ廣大ナル場所ヲ要スルノ失アルヲ免レサルナリ

上述ノ兩法共ニぼたヲ列置シ終レハ潤葉樹枝ノ葉ナキモノヲ以テ其上ヲ被フ之レヲ志スバ又おい志ばト云フ其被ヒ方ノ厚薄ハ元トヨリ寢セ込ミ場ニ生立セル蔭木ノ多少ニヨリテ異ナリト雖モ稍々日光ノ差シ込ム位ヲ適度トス志スバノ要ハぼたヲシテ直接ニ日光及ヒ霜ニ感セサラシメンカタメナリ若シ霜ニ遇ヒ陽光ニ曝露セラル、コト數回ナレハ遂ニぼたノ上側面ノ皮部剝奪シ去リテ單ニ地ニ向ヘル側面ニノミ椎茸發生スルヲ以テナリ故ニ志スバヲ或ハ日除ケ又霜除ケト稱ス寢セ込ミニ就テ就中注意スヘキハ寢セ込ミ場ノ良否如何ニアルカ故ニ左ニ其撰定法ヲ略述セン

- (一) 南方ニ面シテ稍々傾斜セル土地最モ宜シク西面之ニ亞キ東面又之ニ亞キ而シテ北面ノ處最惡ナリ
- (二) 小砂利ノ混シ居リテ雜草繁茂セス坐スルモ直チニ衣服ノ濕フ患ナキ位乾燥シ居ル處宜シ
- (三) 空氣ノ流通宜シキヲ要ス

(四) 蔭木アルヲ要ス

蔭木トハ日光ノ直射ヲ蒙ラサル様ばたヲ被蔭スルタメ必要ナルモノニシテ就中最良ナルハ

第一、あせび又ハつ、じ等ノ灌木林

第二、各種雜木ノ混淆林

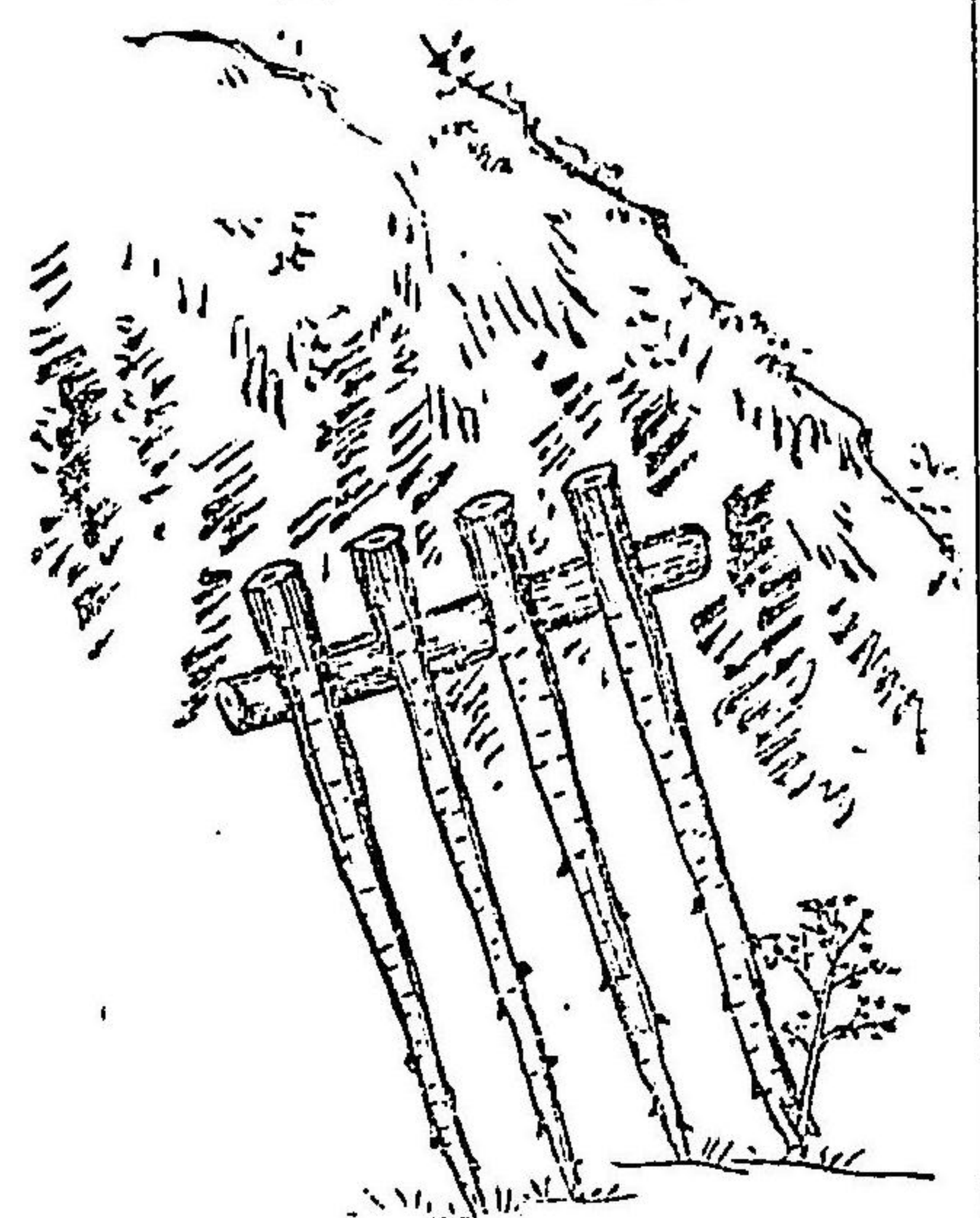
第三、杉扁柏等ノ幼樹林

ニシテ老大ナル樹林及ヒ竹林ハ宜シカラス

第二 志で

志でハならニ比スレハ通常老大ナルモノヲ伐採シ長キ儘寢セ込ムカ故ニ伐木ニ際シ刻ミ山刀ヲ以テ手ノ達スル所迄刻ミヲ入レ置キ然ル後伐採ス然ラサレハ樹幹倒レタル後ニ於テ其幹脚ノ地面ニ觸接セル部分ニ刻ミヲ入ル、コト頗ル困難ナレハナリ而シテ伐木後凡ソ十四五日乃至三十日間位ヲ經テ枝ヲ打チ幹ノ全部ニ刻ミヲ入レ毫モ樹幹ヲ横斷スルコトナクシテ長キ儘寢セ込ムナリ其法傾斜地ニアリテハ第八圖ノ如ク山手ノ方ニ高六寸位ノ枕木ヲ安置シ其上ニぼたノ元口ヲ架シ末口ヲ

第八圖



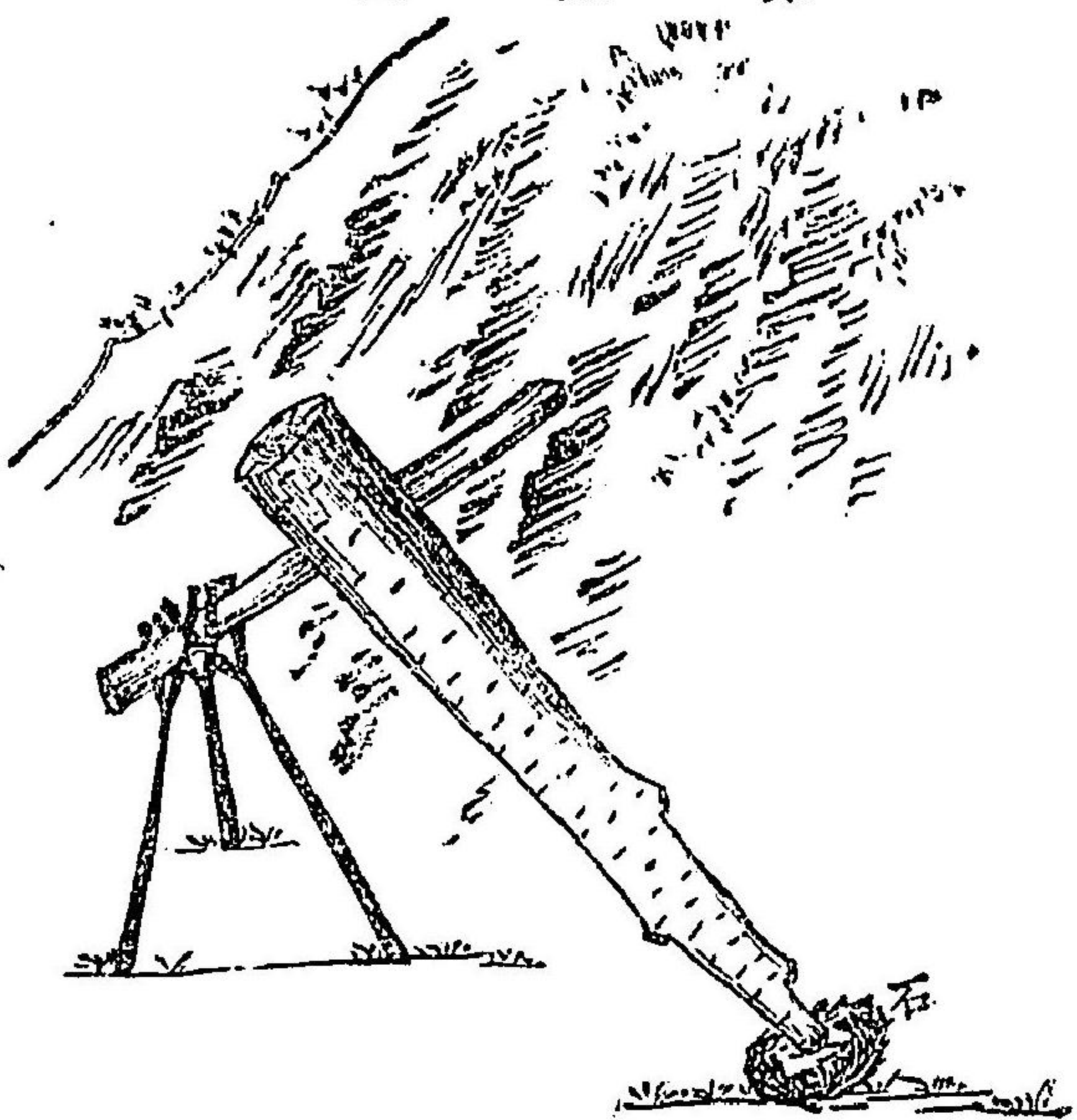
山麓ノ方ニ向ケ地面ニ觸接セシムルヲ常トス而シテ末口ノ方ハ枝ヲ打ツトキ注意シテ圖ノ如クまたヲ殘シ置キ此部ヲ地中ニ挿入スルカ又ハ立樹ノ幹脚等ニ掛ケ以テぼたノ滑下スル患ナカラシムルヲ良シトス然レトモ老大ナル志でニアリテハ樹幹全長ノ儘容易ニ動カシ能ハサルヲ以テ伐木ノ際倒レタ其場所ニ寢セ込ミ置クヲ常トス

斯ク寢セ込ミタル後ハむしむばヲ以テ其上ヲ被フコトならノ條下ニ説述シタル如シ

第三 志らかし并志い

志らかし并志いニアリテハ伐木後其年内ニ枝ヲ打チ刻ミヲ入レ長幹ノ儘寢セ込ムナリ其法第九圖ノ如ク山麓ノ方へまた一個ヲ組ミ立テ之ニ枕木ノ一端ヲ架シ他端ヲ山手ノ土中ニ挿入スルヲ常トシ枕木ノ高サハ其下ヲ人ガ自由ニ通行シ得ルヲ度トス斯ク枕木出來スレハ其上ニぼたノ元口ヲ架シ末口ノ方ハ地上ニ置キ其下ニ石

第九圖



ヲ据へばたヲシテ直接ニ地面ニ接セサラ
 シム蓋シ志らかし并志いニアリテハぼた
 よせ(後章ニ詳ナリ)ヲナスコトナクシテ此
 儘ニテ椎茸ヲ採集スルヲ以テナリ故ニ此
 類ノぼたヲ稱シテ長木ぼたト云フ

○第六章 ぼた寄せ

第一 こなら并おほなら

前章ニ説述シタル寝セ込ミヲ終リ其儘放
 置スレハ伐木ノ年ヨリ起算シテ第三年目
 ノ春ニ至リ間々春子(即チ春時發生スル椎
 茸ヲ云フ)ヲ生スルモノナリ是レ椎茸寄生
 シタル證ナリ因テ其年ノ舊十月ヨリ十二月迄ノ間(若シ此間ニ寄セルコト能ハサル
 モ必ス明年舊一月ヲ經過スヘカラス)ニ於テぼた寄せヲ行フヘシ其法先ツ寝セ込
 場ニ在ルぼた中ヨリ椎茸ノ寄生シタルモノ、ミヲ撰出シ其他ヲ棄却ス即チ

(一) 春子ノ發生シタル痕跡アルモノ

(二) 右ノ痕跡ナキモ山刀ヲ以テ少シク切り目ヲ付ケ檢スルニ其肉色(即チ外皮ノ下
 ニアル肉ノ色ヲ云フ)帶白赤褐色ヲ呈スルモノ

(三) 外皮ノ色恰カモ生立樹ノ外皮ト同色ノ感アルモノ(但此識別法ノミニヨルトキ
 ハ時トシテ椎茸ノ寄生シ居ラサルコトアリ)

ヲ撰出シ肉色暗黒ナルモノ又ハ赤色、白色等ノ薄片狀菌類生シ居ルモノハ椎茸寄生
 シ居ラサルニヨリ棄却スルナリ

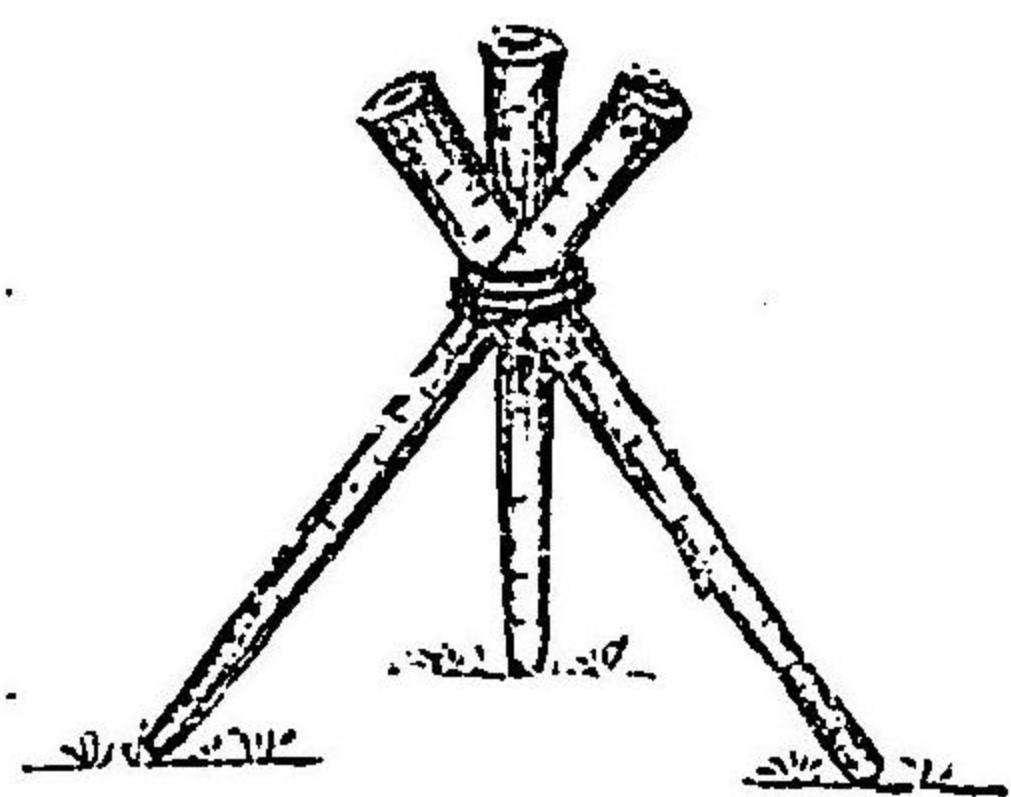
斯クぼたノ撰出終レハ之ヲ適當ナル場所ニ寄せ込ムヘシ其法ニアリ

(第一法) 先ツぼた三本ヲ以テ第十圖ノ如ク三脚ヲ組ミ蔓艸又繩ヲ以テ其接着部ヲ
 結ヒ然ル後其周圍ニ四方ヨリぼたヲ寄せ架ケルナリ

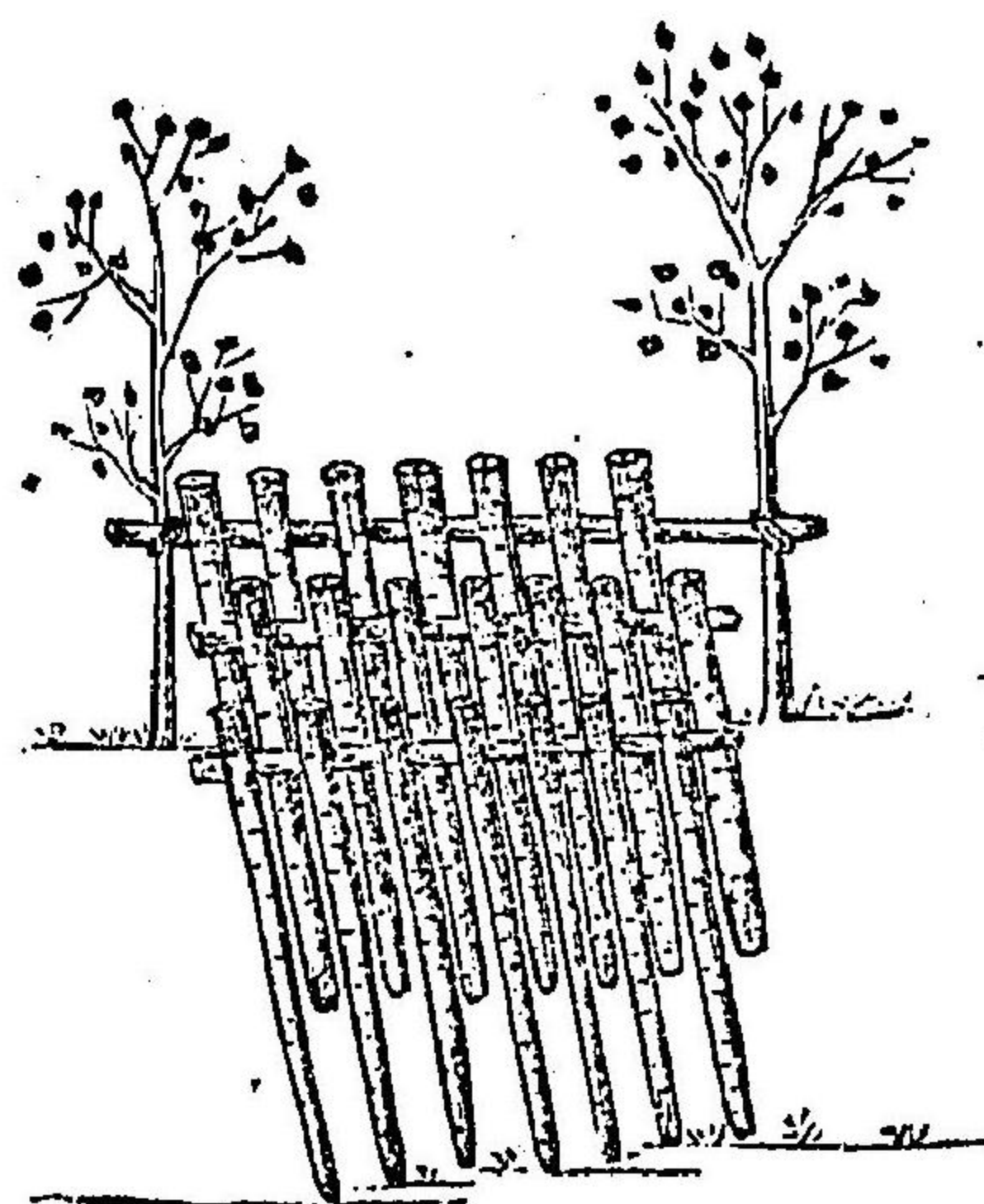
(第二法) 二本ノ立木ニ枕木ヲ結ヒ付ケ之レニぼたヲ列架シ其上ニ順次第二第三ノ
 枕木ヲ置キテ更ニぼたヲ列架スルコト第十一圖ニ示スカ如シ

此兩法共ニぼたノ元口ヲ上ニシ末口ヲ地ニ接セシメ以テ刻ミ目ヨリ雨水ノ侵入セ
 サル様列置スヘシ斯ク寄せ終リタルトキハ兩法共ニ樹枝ヲ以テ其上ヲ被ヒ禽獸カ

第十圖



第十一圖



發生シ來ル椎茸ヲ害スルヲ防クヘシ
 兩法ノ得失 第一法ハ四方ヨリ寄セアルヲ
 以テぼたさばき(後章ニ詳ナリ)ニ際シテ頗ル
 便利ナリト雖モ第二法ハ單ニ一方ヨリ寄セ
 アルヲ以テぼたさばきニ不便ナリ然レトモ
 後者ハ前者ニ比スレハ枕木アルカタヌ一列
 ノぼたト他列ノぼたト相觸接セサルニヨリ
 早ク椎茸ヲ發生スルノ利アリ
 ぼた寄セ場所ハ一二ヶ月ノ後ニ至リテ直チ
 ニぼたさばき場所トナリ此處ニ最早椎茸ヲ
 生セサルニ至ル迄ぼたヲ据エ置クヘキヲ以
 テ充分ニ撰定スルヲ要ス今左ニ其注意スヘ
 キ二三要點ヲ掲ケン

(一) 南面ノ地最モ宜シク次ハ西面次ハ東面

ニシテ務メテ北面ノ地ヲ避クヘシ

- (二) 土地可成平坦ニシテ乾燥セルヲ良トス
- (三) 水流ニ近キヲ要ス(此理後章ニ至テ明ナリ)
- (四) 空氣ノ流通宜シクシテ且其濕潤ナルヲ要ス
- (五) 適當ナル蔭木アリテ粗ナラス密ナラス快晴ノ時ハ日光樹冠ヲ通シテ少シ宛入
 リ込ミ降雨ノ節ハ雨滴ぼたヲ直打セサルモ樹冠ヲ通シテ之ヲ濕スヲ良トス
- (六) 蔭木ニ宜シキハ

第一等 少シク落葉潤葉樹ヲ混生セル常綠潤葉樹林

(是レ蓋シ春子ニハ被蔭密ニシテ風ノ吹キ通ラサル方宜シケレトモ秋
 子ニハ被蔭粗ニシテ風通リ善キヲ可トスレハナリ)

第二等 常綠潤葉樹林

第三等 杉扁柏ノ幼樹林(凡二十年生位)若クハ落葉潤葉樹林

第二 志 で

伐木ノ年ヨリ起算シテ三年目ノ舊十月ヨリ十二月迄ノ間ニ於テぼたヲ撰ミ(其法な

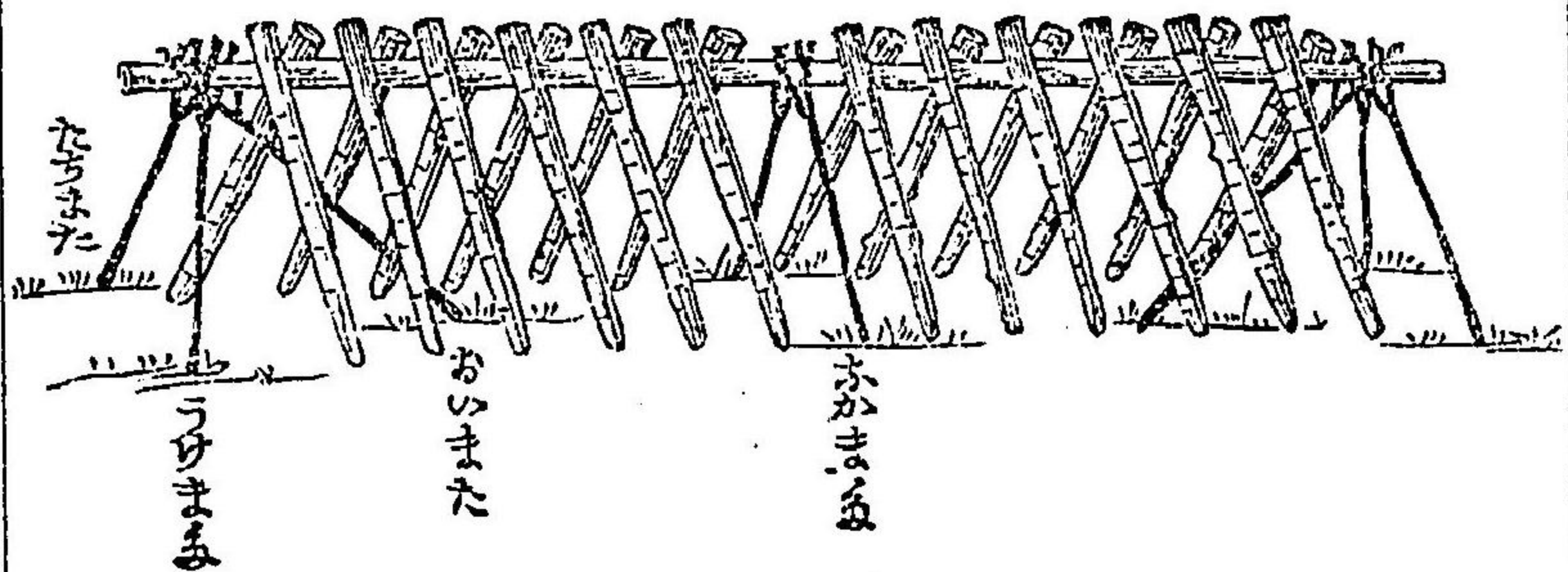
らニ全シ其良好ナルモノ、ミヲ取り鋸ヲ以テ通常五尺ノ長サニ切斷シ幹ノ太キモノハ一人ニテ運ヒ得ル長サニ切り以テならト同法ニ據リ寄せ込ムヘシ

○第七章 ぼたさばき

前章ニ述ヘタル方法ニヨリテ寄せ込ミタルぼたハなら并志でノ論ナク其儘放置シテ翌春(即チ伐木ノ年ヨリ起算シテ四年目ノ春)ニ至リさばくヲ要ス其期節ハ俗ニ云フ奈良ノ水取り(即チ舊二月七日ヨリ十四日迄ノ間ヲ云フ)終レハ寒氣モ最早嚴シカラサルヲ以テ其經過後彼岸ヲ標準トシテ定ムルニアリ即チ通常舊二月二十日頃大凡ソ彼岸入ヨリ十日目位トナル)ヨリさばき初メ大概十日間ニシテ之ヲ了ユト雖モ時候ノ異ナルニ從テ年々多少ノ遲速アルヲ免レス茲ニ一要點アリ曰クさばき後降雨アルハ春子發生ノ爲メニ好都合ナリト雖モ若シ降雪アルニ於テハ春子ノ發生ヲ害スルノミナラス既ニ發生シ居ル椎茸ヲ凍縮セシメタメニ生長シ能ハサルニ至ラシムルヲ以テ充分ニ天候ノ如何ヲ熟考シタル後ぼたさばきニ着手スヘシ其方法蓋シ左ニ述フルカ如シ

ぼたさばきニ適當ナル場所(前章ニ明ナリ)ニ於テ長サ五六尺位此長サハ土地傾斜ノ

第二十圖



度ニ應シテ異ナリ)ニシテ先端二又セル杭木三本宛ヲ組ミ立テ、二個ノまたヲ造リ其上ニ丈夫ナル枕木ヲ架ス之ヲ牛ト稱スまたヲ組ミ立ツル杭木ニ各々名稱アリ其山手ニアルモノヲたちまたト云ヒ谷ノ方ニアルヲうけまたト云ヒ牛ノ内方ニ向ヘルヲねいまたト稱ス而シテ枕木若シ長ケレハ其中央部ニ於テ更ニ二本ノ杭木ヲ以テ一ツノまたヲ組ムヘシ之ヲなかまたト云フ牛ノ高サハ土地傾斜ノ度ニヨリ異ナレトモ凡ソ四尺位ヲ普通トス斯ノ如ク牛ヲ組ミ終レハ枕木ノ兩方ヨリぼたヲ架スルコト第十二圖ニ示スカ如シ此場合ニ於テモ亦ぼたノ元口ヲ枕木ニ架シ末口ヲ地面ニ接セシムルコト勿論若シぼたニ長短アレハ長キモノヲ谷ノ方ニ置キ短キモノヲ山手ニ据エ務メテ頂端ノ高サヲ一致セシムヘシ牛ハ椎茸ノ最早發生セサルニ至ル迄ぼたヲ擔フニ耐ユ

へキカ故ニ容易ニ腐朽セサル木ヲ撰ミテまたヲ組ムヘク決シテ繩等ヲ以テ枕木ヲ立木ニ結ヒ付クヘカラス是レ後者ノ如キモノハ到底數年ノ久シキニ耐ヘサルノミナラス暴風ニ際シテ立木ノ動搖スルタメ轉倒スレハナリ而シテ枕木ハ元口周圍凡一尺五寸位ノモノヲ宜シトシ可成眞直ニシテ外皮粗糙ナル樹種ヲ撰ムヘシ即チ外皮ヲ有セル杉樹最良ニシテ樅之ニ亞キ栗松等亦之ニ亞クト雖モ未だつばきさるた、ちしやのき等ノ類ハ外皮平滑ナルカ故ニ宜シカラス

○第八章 椎茸ノ發生

椎茸ハ四季ノ土用毎ニ發生スルモノニシテ冬期生スルモノヲ寒子、春時生スルヲ春子、夏期ニ發生スルヲ夏子ト云ヒ秋期生スルモノヲ秋子ト稱ス寒子ト春子トハ自然ニ發生スルモノナリト雖モ夏子并秋子ハ天候又ハ人爲ノ刺戟ニヨリテ生スルモノナリ

(寒子) 寒子ハ寢セ込ミノ翌冬又ハ三年目ノ冬ニ至リ(ほた寄せ遅レタル場合)寢セ込ミ中ノぼたニ發生スルモノニシテぼたさばき後ニハ發生スルコト稀ナリト雖モ温暖ナル地方ニ於テハ亦往々發生スルモノナリ其寢セ込ミ中ニ於テ生スル所以ハ寢

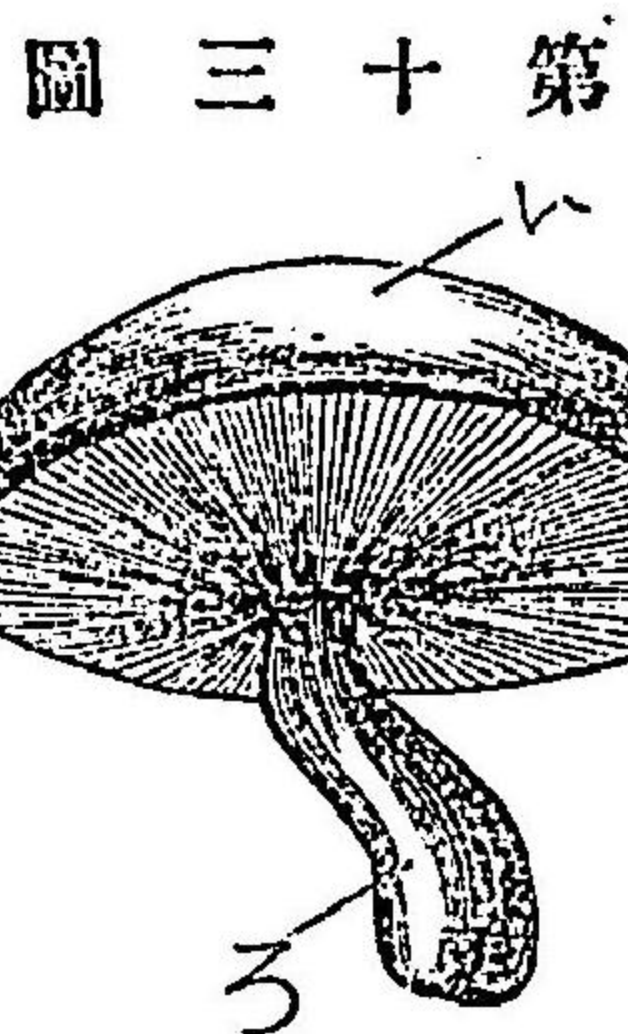
セ込ミノ當時ニアリテハ小面積ノ地ニ多數ノぼた堆積シアルノミナラスむしとぼたヲ以テ被覆シアルカ故ニぼたハ恰カモ暖室中ニアルト同理ニテ直接ニ外來ノ嚴寒ニ感スルコト甚シキヲ以テ間々發芽スルモ嚴寒ノタメニ凍縮スレハナリ之レヲ要スルニ寒子ハ必竟多量ニ發生セサルモノニシテ元トヨリ椎茸製造ノ目的物ニ非ルナリ

寒子ハ笠厚ク脚短カク且太クシテ色黒クござめ白ク味最モ佳ナリ又貯ヘ易シ

(注) 椎茸ノい部(第十三圖)ヲ笠ト云ヒ其裏面ノ縦線ヲござめ

ト稱シろ部ヲ脚ト云フ總テ椎茸ノ品位優等ナルモノハ脚短クシテ太ク笠厚クシテ色淡ク頗ル香氣アリト雖モ劣等ナルモノハ脚細長ニ笠薄クシテ色暗黒ナリ

(春子) 春子ハ秋子ニ亞テ椎茸製造事業ノ目的物ニシテ伐木ノ年ヨリ起算シテ三年目ノ春(即チ寄せ込ム年ノ春)ヨリ發生スト雖モ其目的トスル所ハぼたさばきヲナシタル翌春即チ四年目ノ春ヨリ發生ス



第三十圖

ルモノトス春子ハ自然作用ニヨリテ生スルカ故ニ其期節固ヨリ一定セスト雖モ凡ソ春ノ彼岸ヨリ八十八夜迄(雨降レハ發生早ク止マル)ノ間トシいちごノ花盛リヲ最好期節トス然レモ虎杖ノ發芽期并藤ノ花盛リニ於テ尙盛ンニ春子ヲ生ス故ニ亦藤子及虎杖子ノ稱アリ

總テ椎茸ハ寒キ時生スレハ笠厚ク脚大ナルモ暖カナル時生スレハ笠薄ク脚長キヲ常トス此理ニヨリ春子ノ早春生シタルモノト晩春生シタルモノトハ氣候ニ寒暖ノ差アルカタメ從テ其形狀ヲ異ニセリ概シテ春子ハ寒子ニ亞テ味佳ナリト雖モ容易ニ虫ヲ生スルカ故ニ貯藏ニ困難ナリ

椎茸ニどんこト薄葉トノ別アリどんこハ主ニ支那ニ輸出スルモノニシテ脚短大笠厚ク且開カサルモノヲ云フ薄葉ハ之ニ反シテ脚長ク笠薄クシテ開ケルヲ常トス早春晴天打續ケハ其發生シタル春子ヨリどんこヲ製スルヲ得レトモ晩春生シタルモノハ主ニ薄葉ナリ

(夏子) 舊六月後ニ於テハ何時ニテモぼたヲ水ニ漬シテ打撃スレハ椎茸ヲ發生スルモノニシテ夏子ハ此理ニヨリ天然又ハ人爲ノ刺撃ヲ受ケテ發生シ決シテ寒子并春

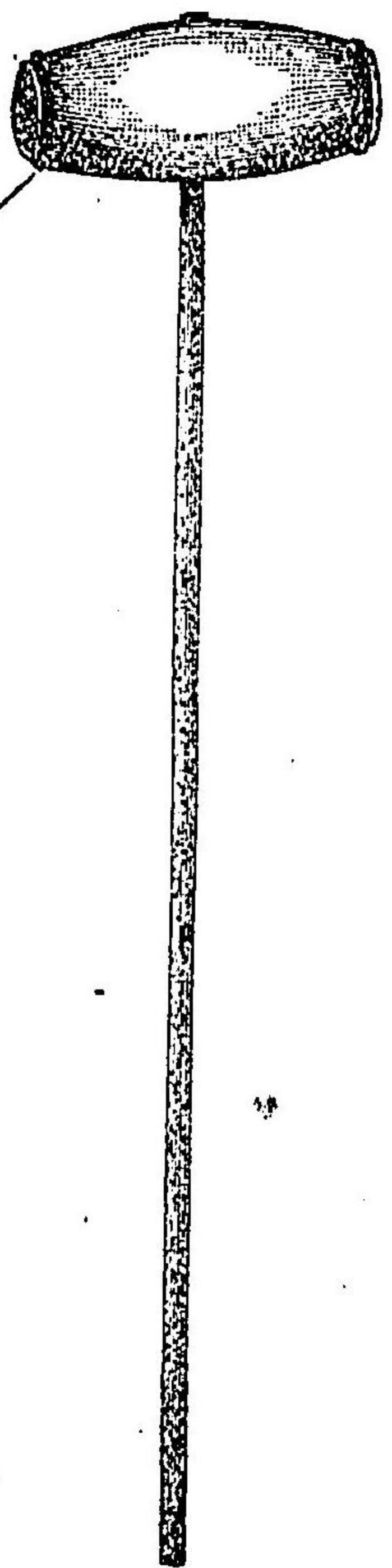
子ノ如ク自然ニ生スルモノニアラサルナリ即チ夏時雨水ニ漬サレタルぼたカ風ノ爲ニ倒ル、カ又ハ蔭木ノ落枝等ニヨリ打タル、片ハ夏子ヲ生スルモノニシテ夏時暴風雨等アルトキハ其四五日後ニ於テ往々多クノ椎茸ヲ發生シタルぼたヲ視ル又タ夏ノ土用ニぼたヲ水ニ漬シ棹ニテ打チ置ケハ(此法秋子ノ條下ニ詳ナリ)早キモノハ二三日間ヲ經テ椎茸ヲ發生ス故ニ亦土用子ノ稱アリ然レモ夏時ハ暖カナル爲椎茸盛ニ生長スルカ故ニ天氣惡ケレハ發生後六七日目位ニ採ラサルヘカラス又天氣宜シキモ十五日間以上ヲ經過セシムヘカラス然ラサレハ腐敗スルノ患アレハナリ夏子ハ脚就中細長ニシテ笠薄ク色淡褐ニシテ味宜シカラス容易ニ虫ヲ生シテ保存スルニ難シ

夏子ヲ生シタルぼたハ秋子ノ發生頗ル惡クシテぼたノ椎茸發生年限ヲ短縮スルノミナラス夏子ハ多量ニ生スルモノニアラス且其品位劣等ナルヲ以テ固ヨリ椎茸製造事業ノ目的物ニアラサルナリ俗ニ云フ夏子ヲ作ルモノハ眞ノ椎茸營業者ニ非スト亦宜ナル哉

(秋子) 椎茸製造業ノ目的物タル秋子ハ伐木ノ年ヨリ起算シ四年目ノ秋ニ至リ人爲

ノ刺撃ヲ受ケテ發生スルモノニシテ即チぼたヲ水ニ漬シ槌ヲ以テ之ヲ打撃スルニ
 アリ其期節ハ氣候ノ如何ト製造者ノ目的トニヨリテ異ナルモノニシテ秋ノ土用前
 ニ打ツアリ土用中頃ニ於テスルアリ又間々土用後ニナスモノアリト雖モ舊九月中
 ニ打ツヲ良トス而シテ土用前ニ打チタルモノハ大抵四日目土用中頃ナレハ五日目
 位土用後ナレハ八日目位ニシテ椎茸發芽スルモノニシテ五日目位ニ發生スル時ヲ
 好期節トス若シ打撃後八九日ヲ經テ尙發芽セサルモノハ椎茸ノ發生惡シ而シテ一
 歳ぼた(伐木ノ年ヨリ起算シ四年目ノモノ)ノ外二歳五年目ノモノ)及三歳六年目ノモ
 ノぼたヲ有スルハ秋ノ彼岸後十日位ヲ經テ(即チ凡舊八月下旬)先ツ三歳ぼたヲ打
 チ次ニ二歳ぼたヲ打チ然ル後最後ニ一歳ぼたヲ打ツヲ良トスぼたヲ水ニ漬ス時間
 ハ天氣ノ模様トぼた乾濕ノ度トニヨリ異ナレトモ通常十二時間位ヲ適度トス即チ
 今夕漬シタルモノヲ明朝打チ明朝漬シタルモノヲ明夕打ツナリ然レトモぼた乾キ
 居レハ尙數時間永ク漬シ置クヲ要スレトモぼた濕リ居ルカ又ハ雨天ナレハ決シテ
 長ク漬シ置クヘカラス是レ肉腐敗スルノ患アレハナリ而シテぼたヲ打ツニハ通常
 第十四圖ニ示スカ如ク槌製ニシテ兩端ニ鐵輪ヲ嵌メタル槌ヲ以テスレトモ間々鐵

第十四圖



鐵輪

製ノ槌ヲ用フルモノアリ之ヲ以テぼたヲ打撃スルノ方法ハ人々各々異ナレトモ元
 口ヲ二打シ末口ヲ一打スルヲ常トシ務メテ皮部ヲ破ラサル様注意スルニアリ然レ
 トモぼたノ中央部ニ皮部剝奪シ居ル所アレハ其局部ト元口末口ト各々一打スル
 ヲ良トス二歳ぼた并三歳ぼたニアリテハ皮部點々剝奪シ居ルカ故ニ元口末口ノ外
 ニ必ス中央部ヲ一打スルヲ常トス而シテぼたヲ打ツニハ可成水中ニ於テスヘシ是
 レ全部一様ニ振
 動ヲ受クルノミ
 ナラス破折スル
 一少ナケレハナ
 リ要スルニぼた
 ヲ打撃スルハ其全部ニ振動ヲ與フル爲ナルカ故ニ打撃ノ強弱ハ固ヨリぼたノ大小
 ニヨリ斟酌セサルヘカラス土俗云フ打撃ノ數少クシテ強ケレハ發生スル椎茸大ニ
 シテ數少ク之ニ反シテ打撃ノ數多クシテ弱ケレハ椎茸小ニシテ數多シト

(注) 槌ハ頭部ノ兩端直徑二寸中央直徑二寸五分長六寸ニシテ柄ノ長三尺五寸

直徑八分位ノモノヲ以テ普通ノ大サトス

ぼたヲ漬スニハ通常谷川ヲ漚キテ水ヲ溜メ其中ニ於テスト雖モ谷川不便ナル所ニ於テハ預メ池ヲ掘リ天水ヲ貯ヘ置カサルヘカラス是レ蓋シぼた寄セ場撰定ニ際シテ流水近キニアルヲ要スル所以ナリ水ノ深淺ニ至リテハ固ヨリ一定ノ制限ナシト雖モ少クモ最大ナルぼたヲシテ其中ニ沈マシムルニ足ル丈ケノ深サナカルヘカラス然リ而シテ流水ト溜水トハぼたニ及ホス關係大ニ異ナルモノニシテ溜水ハ温暖ナルカタメ之ニ漬サレタルぼたハ流水ニ漬サレタルモノニ比スレハ秋子發生ノ量多キ代リニ一年位肉持チ惡シト云フ即チぼた々々流水ニ漬ストキハ假リニ三年間椎茸ヲ發生スルモノトナスモ溜水ニノミ漬ストキハ二年間ニシテ椎茸ヲ發生セサルニ至ルト云フ

秋子ノ早ク生シタルモノハ氣候温ナルカ爲メ速ニ生長シ脚細長笠薄クシテ主ニ薄葉トナレトモ遅ク發生セシムレハ脚短大笠厚キヲ以テ晴天打續ケハ主ニどんことナル要スルニ秋子ハ春子ニ比スレハ味稍々劣ルカ如キ感アルモ虫ヲ生スルコトナキニヨリ久シク貯蓄スルニ易シ

以上ハなら并志でノぼたニ付テ説述セリト雖モ他ノ樹種ニアリテハ自ラ其趣ヲ異ニセリ即チ志らかじ、志いニアリテハ伐木後四年目ノ春ニ至リテ春子ヲ採收シ其年ノ秋ニ至リ氣候將サニ漸ク定マラントスルノトキ大雨ヲ待チ大ナル槌ヲ以テ元口ノ心材及ヒ枝ヲ伐リタル痕跡ヲ強ク打チ置クヘシ然ルトキハ五日乃至八日間ヲ經テ秋子ヲ發生スルモノニシテ決シテ前者ノ如ク水ニ漬スコトナシ蓋シ此等ノ樹種ニアリテハ長木ぼたニシテ點々所々ニ寝セ込ミタル儘ナルカ故ニ一々之ヲ水ニ漬スト能ハサルノミナラス若シ之ヲ水ニ漬シテ打ツトキハ翌年ヨリ椎茸ヲ發生セス殊ニ栗ぼたノ如キハ翌年ニ至リ皮部盡ク剥奪シ去リテ復椎茸ヲ生セサルニ至ルト云フヲ以テナリ

○第九章 椎茸發生ノ分量并年限

なら并志で

伐木後四年目ノぼたハ春秋共ニ最モ多ク椎茸ヲ發生スルカ故ニ椎茸製造者ハ實ニ此年ニ於ケル收穫ノ多少ニヨリテ損益如何ヲトスルモノニシテ二歳(五年目)三歳(六年目)等ニ至リテハ初メヨリ計算ニ加ヘス單ニ剩利ト見做スヲ常トセリ即チ四年目

ニ於ケル春子ノ普通分量ハ俗ニ云フ

千三荷

但シぼた千荷ニ付干シ上ケタル椎茸三荷ノ割合ト云フ意味ニシ

テぼたノ一荷ヲ重量十二貫目トシ椎茸ノ一荷ヲ十貫目トス

ニシテ最モ能ク發生シタルトキハ

千五荷

即チぼた二百荷ニ付椎茸一荷ノ割合

ニシテ秋子ノ分量ハ春子ニ比シ半荷若クハ一荷多キモノトスレトモ春子ト秋子トハ互ニ相提携スルモノニシテ春子少ナケレハ秋子多キヲ常トセリ

二歳ぼたハ一歳ぼたノ四割位椎茸ヲ發生スルモノナレトモ一歳ノ時發生量少キトキハ間々五割又ハ六割位生スルコトアリ三歳ぼたニ至リテハ一歳ぼたノ凡一割乃至二割位トス四歳ニ至レハ皮部大概剝奪シ去ルカ故ニ發生量實ニ僅少ナリ五歳ニ至テハ概子發生セサルモノナリ

志らかし并志い

此兩者モ亦伐木後四年目ニ於テ最モ多量ニ椎茸ヲ發生スルモノニシテならしでニ比スレハ發生年限遙ニ長シ而シテ此兩者ハ長木ノ儘椎茸ヲ發生セシムルカ故ニぼ

た何荷ニ付椎茸何荷ヲ生スルヤノ割合判然タラスト雖モ今二歳後ニ於ケル發生量ヲ一歳ノ發生量ニ比スレハ大略左ノ如シ

二歳ハ 八割

三歳ハ 六割

四歳ハ 四割

五歳ハ 二割

六歳ハ 一割

志らかし并志いハ主ニ大木ヨリぼたヲ作ルカ故ニきり志ゆん宜シキヲ得レハ皮部剝奪スルモ尙能ク椎茸ヲ發生スルコトアリト云フ

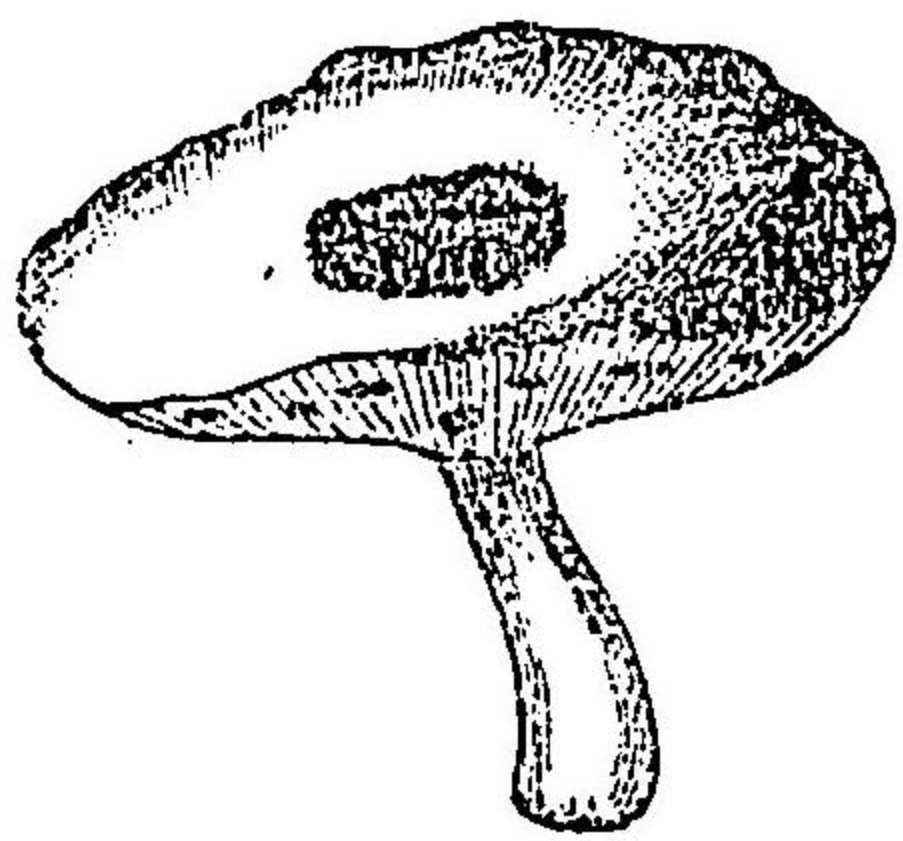
○第十章 椎茸ノ採收期

椎茸ノ生長ハ實ニ氣候ノ寒暖ト晴雨トニ關スルモノニシテ發芽後温暖ニシテ降雨適度ナレハ數日ヲ出テスシテ生長ノ極度ニ達スルモ寒冷ニシテ雨少ナケレハ其生長實ニ微々タルモノナリ見ヨ寒子若クハ春子ノ早生シタルモノニアリテハ嚴寒ト乾燥空氣トニヨリテ發芽後十數日ヲ經ルモ毫モ生長スルコトナク其間終始殆ト斃

豆大ニシテ剩へ頭部寒氣ノ爲ニ龜裂セルモノアルヲ又見ヨ春子ノ遲生秋子ノ早生及夏子ニアリテハ發芽後往々四五日ヲ經テ一定ノ大サニ生長シ十日前後ヲ經テ腐敗ニ傾カントスルヲ是レ蓋シ採收期ヲ定ムルノ必要ナル所以ニシテ其巧拙如何ニヨリテ實ニ椎茸ノ品位ニ優劣アラシメ從テ事業ニ損益アラシムルニ至ルモノナリ

椎茸ノ大サニ至テハ固ヨリ不同ニシテ其大ナルモノニ至テハ實ニ徑六寸餘ニ達スルモノアリ是ヲ以テ採收期ヲ定メント欲セハ先ツ其形狀ト色トヲ檢シ以テ熟否如何ヲ判定セサルヘカラサルナリ即チ發芽ノ初メニアリテハ圓キコト豆ノ如ク其色淡褐ナレトモ生長スルニ隨ヒ頭部笠次第二扁平トナルモ尙頗ル厚クシテ暗褐色ヲ呈シ其縁邊及裏面ハ白毛ヲ以テ被ハレござめヲ視ルヘカラス是レ生長力ノ最大時期タリ此期節ニ於テ笠割合ニ薄ク脚細キモノハ爾後甚タシク生長セサルヲ知ルヘシ更ニ生長シテ大サノ極度ニ達スレハ笠開キテ縁薄ク其表面水平トナリ色淡白トナリ判然ござめヲ現出ス是レ則チ眞ノ熟期ニ達セサルモノニシテ此時期ニ及ンテ連日晴天打續キ其儘乾燥スルカ又ハ降雨アリト豫想スレハ直ニ採收シ火力ヲ以テ乾燥セシムレハ品位上等ナルモノヲ得ヘシト雖若シ此期節ヲ經過シテ徒ラニ降雨

圖五十第

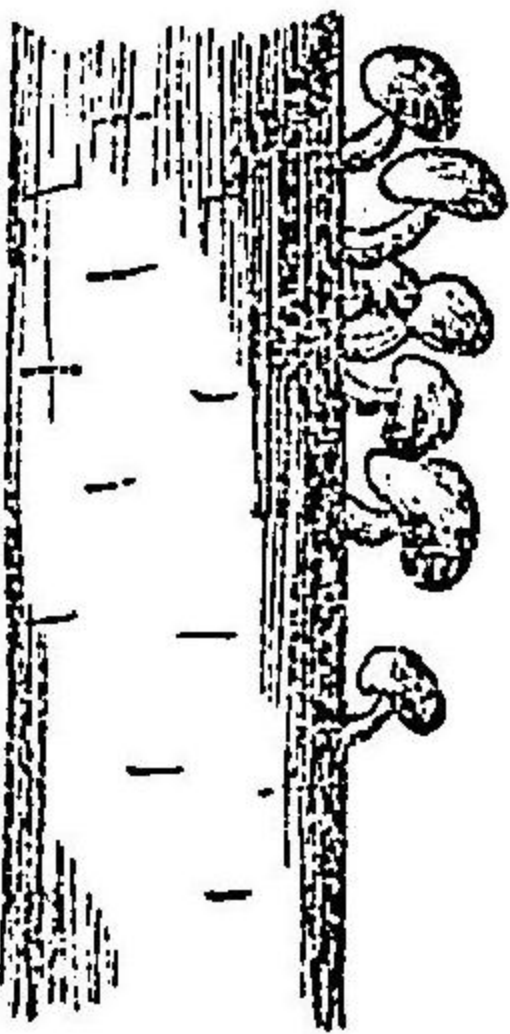


ニ遭遇セシムルコトアレハござめニ點々黒斑ヲ生スルニ至ル如此キモノヲ俗ニ星入ルト云フ是レ則チ既ニ熟期ヲ經過シテ較々腐敗ニ傾カントスルノ兆ナルカ故ニ晴天ヲ俟テ直ニ採收シ乾燥セサルヘカラスト雖モ最早ござめ汚染シテ品位上等ナルモノヲ得ヘカラス之ヲ黒子ト云フ尙一層期節ヲ經過スレハ第十五圖ノ如ク笠ノ上部暗黒色トナル是レ既ニ腐敗ヲ初メタル兆ニシテ如此キモノハ全體容易ニ腐敗シ去ルナリ是ニ因テ之ヲ見ルニ椎茸發芽ノ當初并生長期間ニ在テハ降雨度ニ適スルハ必スシモ希望スヘキ一要点ナリト雖モ既ニ熟期ニ達スルニ及ンテハ連日晴天タルコト頗ル必要ニシテ若シ降雨アルヘキヲ豫想スルニ於テハ直チニ採收ニ着手セサルヘカラス故ニ天候ノ如何ヲ豫察スルコト椎茸製造ニ取リテ實ニ一大要務タリ土俗云フ椎茸ノ頭部色淡クナリテ龜裂スレハ早天續クノ兆ニシテ之ニ反シ頭部濃褐トナリ活活スレハ雨近キ兆候ナリト

(注) 椎茸熟期ニ達スルモ晴天ノミ打續ケハ二三十日間位星入ラサルコトアリト雖モ若シ星入ルノ兆アレハ晴天ナルモ直ニ採收シテ乾燥スルヲ宜シトス

第十六圖ノ如ク一ヶ所ヨリ多數ノ椎茸重生スルトキハ未タ熱期ニ達セサルモ大抵ノ大サトナリタル時ヲ俟テ重ナリ居ルモノヲ一箇宛抜キ取ルヘシ然ルトキハ殘存セルモノ能ク生長ス之レヲ俗稱じやみぬきト呼フ蓋シ造林上ノ間伐ト同一理ナリ此じやみぬきハ秋子ニ多クシテ春子ニ少ナシ是レ秋期ニ於テハ椎茸一時ニ發生スルモ春期ニ在テハ漸ヲ追フテ發生スルヲ以テナリ

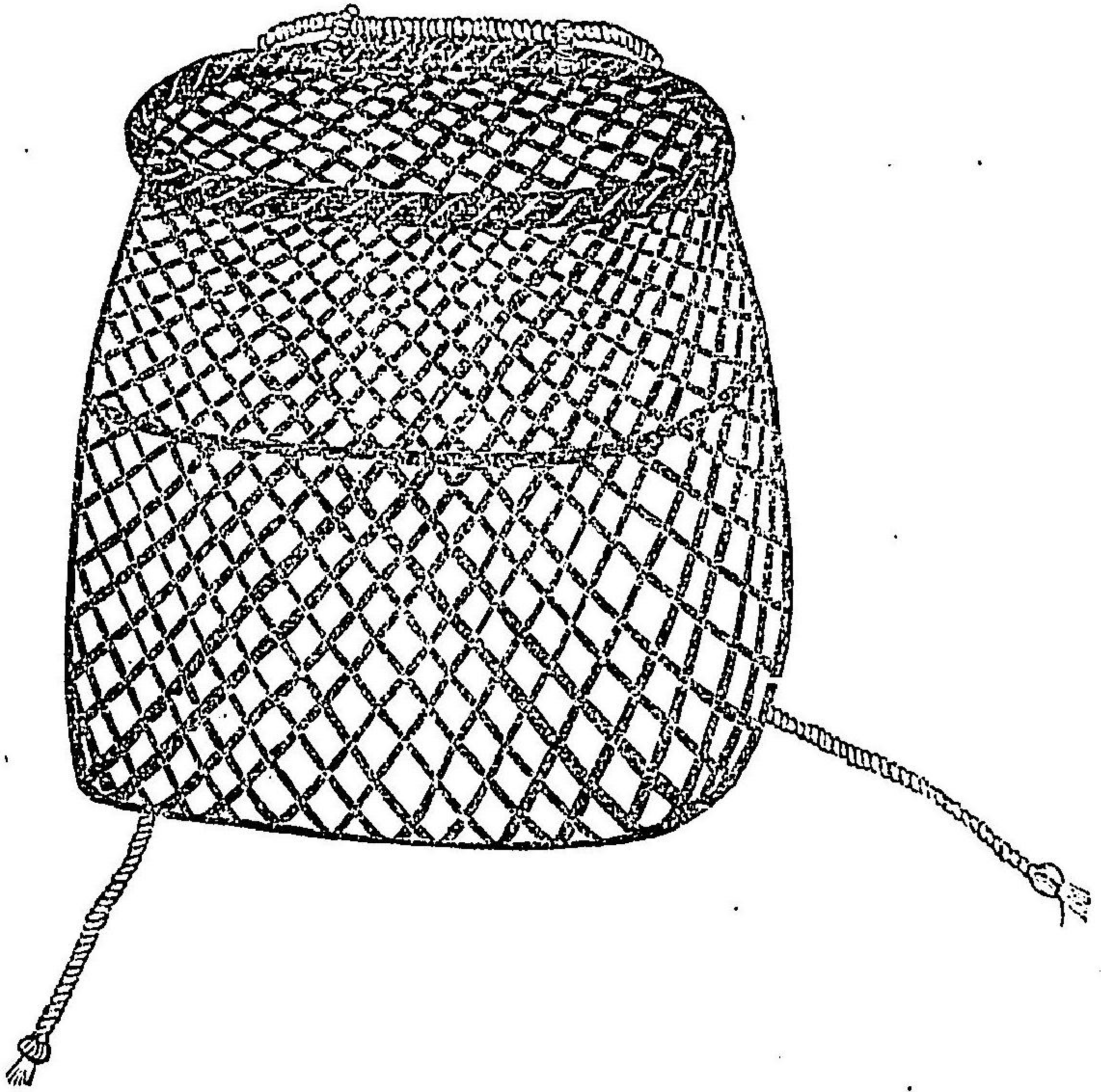
第十六圖



爰ニ俗稱ぼうずたけナルモノアリ春秋兩期共ニ往々ぼたノ悪キモノニ生ス即チ脚太ク且長クシテ笠圓ク黒色ヲナシ其狀恰カモ開カザル松茸ニ彷彿タリ此種類ノモノハ所謂不具物ニシテ生長シ能ハサルカ故ニ直チニ採收スルヲ良トス

(採收方法) 椎茸ヲ採收スルニハ務メテぼたノ皮部ヲ損セサル様注意スヘキハ必要ナル一事ナリト雖モ一度椎茸ヲ發生シタル局部ヨリハ更ニ再ヒ發生スルコトナキカ故ニ製造者ハ爪ヲ以テ可成脚根ヨリ深クモキ取ルヲ常トセリ蓋シ如斯クスレハ椎茸ノ重量増加スルヲ以テナリ若シ不熟練者椎茸ヲ採收スレハ大概脚ノ下部ヲぼたニ附着セシメ置クヲ常トセリ俗稱之ヲさるもぢきト云フ蓋シ野猿ノぼた場ニ襲來スルヤ主トシテ頭部ヲ食ヒ脚部ヲ殘シ置ケハナリ

第十七圖

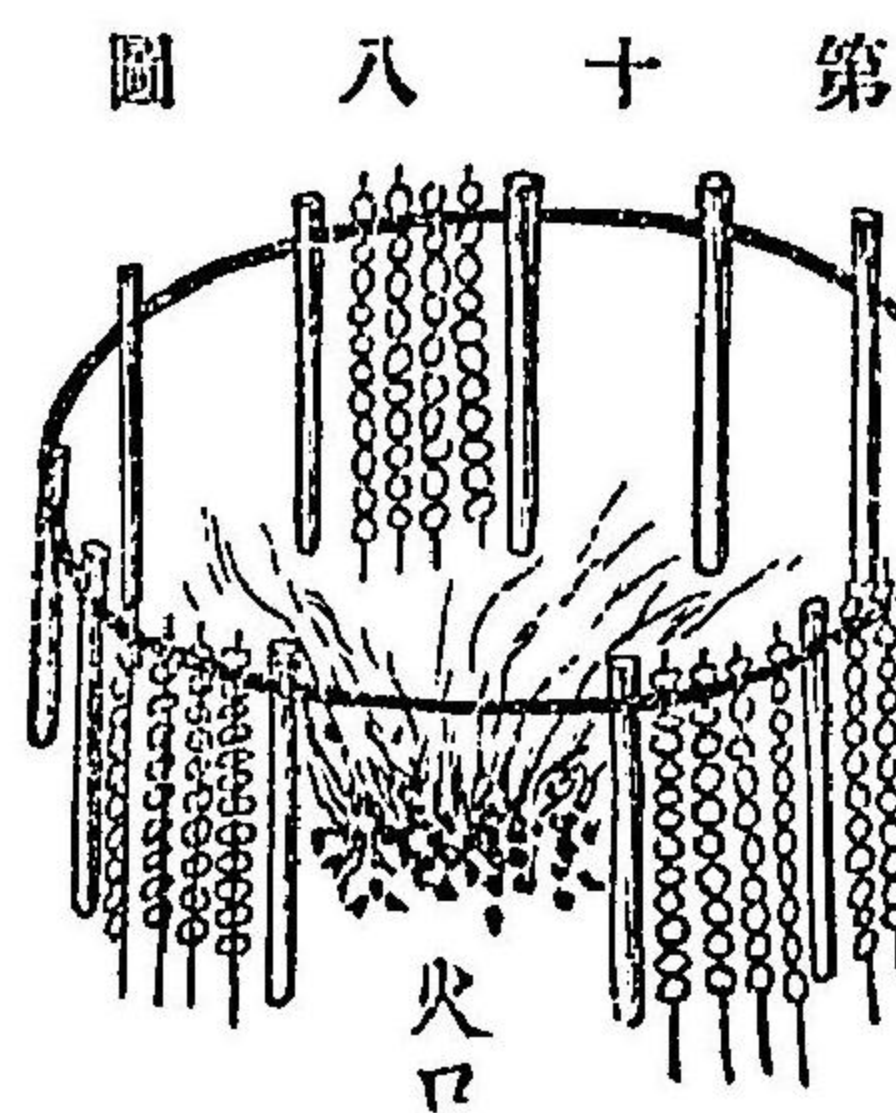


椎茸採收人ハ第十七圖ニ示スカ如キ籠ヲ腰部ニ結ヒ付ケ此中ニ椎茸ヲ入ル、ヲ常トス之ヲつけむト云フ其大サハ口ノ短徑六寸五分長徑九寸五分深サ一尺位ノモノヲ普通トス而シテ採收シタル椎茸此籠ニ滿ツルキハ更ニ荷ヒ籠ニ移シ其之ニ滿ルニ及ンテ小屋ニ荷ヒ行クナリ荷籠ハつけむト同形ニシテ只大ナルノミ即チ口ノ長徑凡二尺深サ凡シ二尺位ノモノニシテ常ニ二個ヲ備フ

春子ハ漸ヲ追フテ發生スルモノナルカ故ニ循環法ヲ以テ熱期ニ達シタルモノヨリ
逐次採收スルヲ良トスレトモ秋子ハ一時ニ發生スルヲ以テ其多數カ熱期ニ達スル
ヲ俟チ一時ニ採收スルヲ可トス

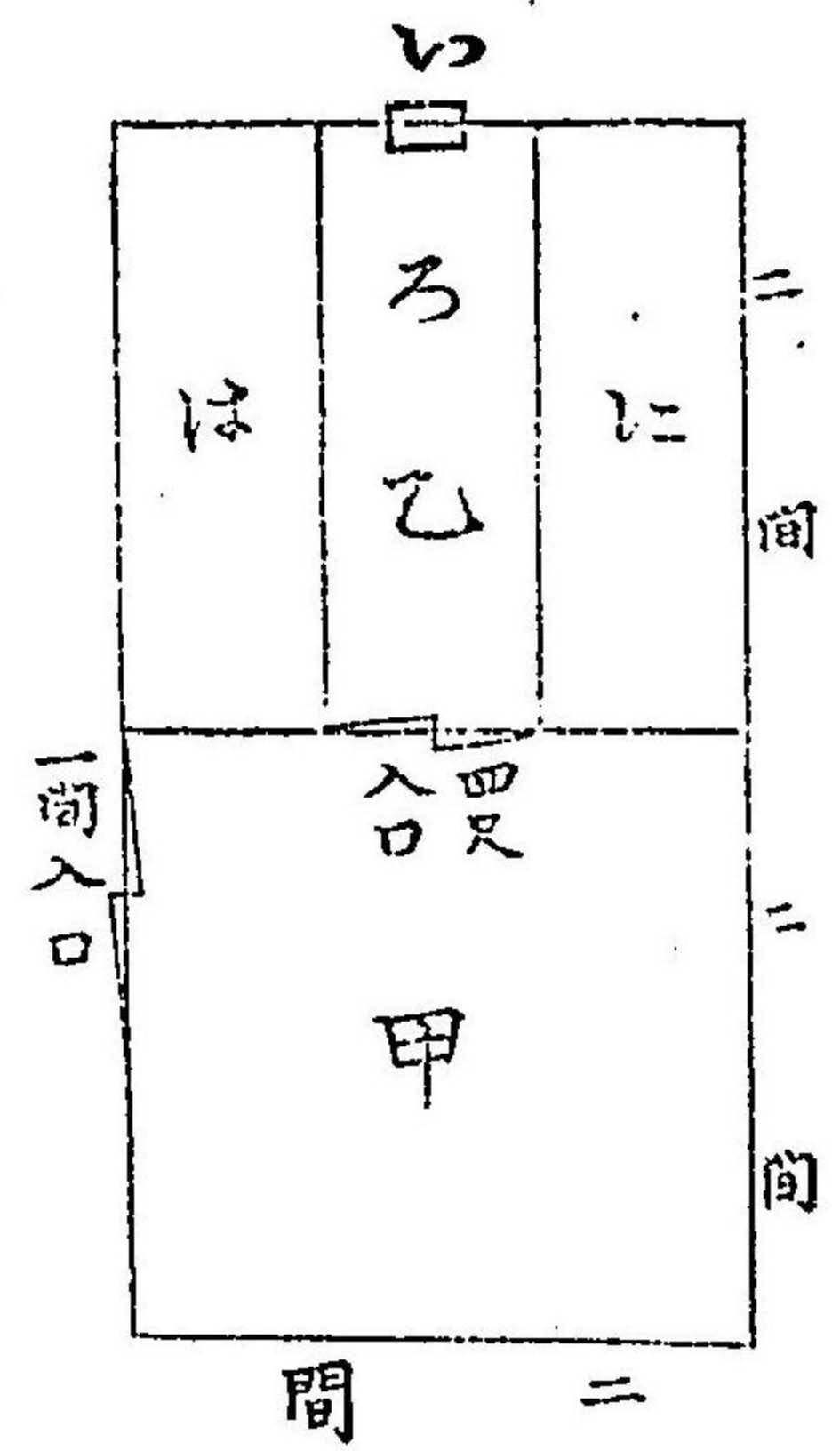
○第十一章 椎茸乾燥法

(第一法) 串干シ 小屋ニ運ヒタル椎茸ノ脚部ヲすゝたけニテ造リタル長五尺位ノ
串ニ貫キ(之ヲ貫クニ串ノ下部五寸位ヲ殘シ置クヘシ)火
ヲ以テ炙ルノ法ニシテ即チ第十八圖ニ示スカ如ク小屋
ノ中央土間ニ凡ソ三尺宛ノ距離ヲ以テ長四尺五寸位ノ
杭數多杭ノ數ハ椎茸ノ多少ニヨリ異ナリ)ヲ圓形ニ打チ
一方火口ノ處ハ杭間ノ距離ヲ少シク廣カラシム而シテ
志らふじト稱スル耐火性強キ蔓艸ヲ以テ各杭ヲ結ヒ付
ケ其中央ニ於テ火ヲ焚キ串挿シニシタル椎茸ヲ志らふ
じニ立テ掛ケ以テ乾燥セシムルニアリ但シ椎茸ヲ乾スニハ先ツ充分ニござめヲ乾
カシタル後表面ヲ少シク乾スヘシ實ニ火ノ強弱并乾燥ノ度ニヨリテ椎茸ノ品位ニ



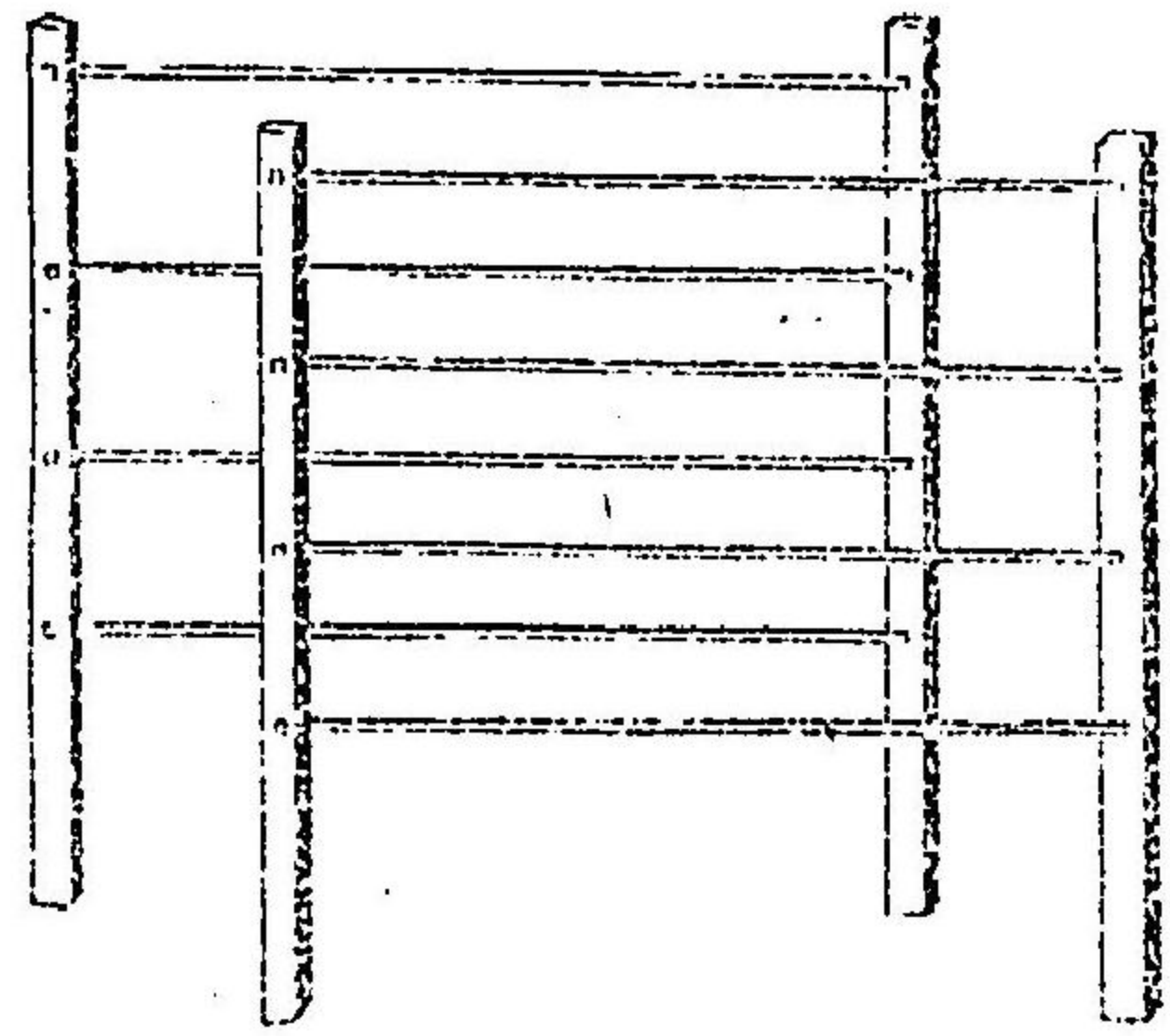
優劣ノ差ヲ生スルモノナリ宜シク注意スヘシ
此方法ハ一々串挿シニスルタメ手數多キト多量ノ薪材ヲ要スルト且椎茸ノ容積増
加スルトニヨリ不便少カラサルヲ以テ今ヲ去ル凡ソ十年前既ニ舊法ニ屬セリ
(第二法) 木干シ 眞ノ木干シハ熱期ニ達シタル椎茸ヲ頭部ノ固クナル迄ぼたニ付
ケ置キ然ル後採リテ籠ノ上ニ並へ更ニ日光ニ干スナリ是レぞんこノ眞製法ニシテ
如此キモノハござめ白ク笠淡褐色ニシテ品位頗ル上等ナリ然レトモ若シ降雨アル
ヲ豫察スレハ笠ノ固クナル迄待ツコト能ハサルカ故ニ直チニ採リテ日光ニ干スナ
リ之ヲ干スニ當リテ既ニ笠ノ固クナリ居ルモノハ別ニ注意ヲ要セサレトモ未タ濕
リ居ルモノハ先ツ笠ノ表面ヨリ充分ニ乾カシ然ル後ござめヲ干スヘシ是レ初メヨ
リござめヲ干ストキハ早ク乾クト雖モ其色汚染シ爲ニ品位劣ルヲ以テナリ
(第三法) 室干シ 此法ハ現時盛ニ行ハル、モノニシテ乾燥室内ニ於テ炭火ニヨリ
椎茸ヲ乾燥セシムルナリ故ニ特ニ此カ用ニ供スル小屋ヲ新設スルヲ要ス其廣サハ
椎茸ノ多少ニヨリ異ニシテ幅二間長四間ノモノアリ長五間ノモノアリ固ヨリ一定
セスト雖モ要スルニ第十九圖ノ如ク之ヲ二室ニ別チ甲ヲ番人若クハ製造者ノ宿所

第九十圖



トシ乙ヲ乾燥室トシ周圍ハ盡ク壁トシ
 只いノ所ニ一小窓アリテ明リ窓ト云ヒ
 光線ヲ入ル、ト共ニ開閉ノ便ニヨリテ
 室内ノ温度ヲ加減スルノ用ニ供セシム
 乙室ハ悉皆土間ニシテろハ通路は及
 ハ炭火ヲ入ル、所ニシテ此場所ニハ各

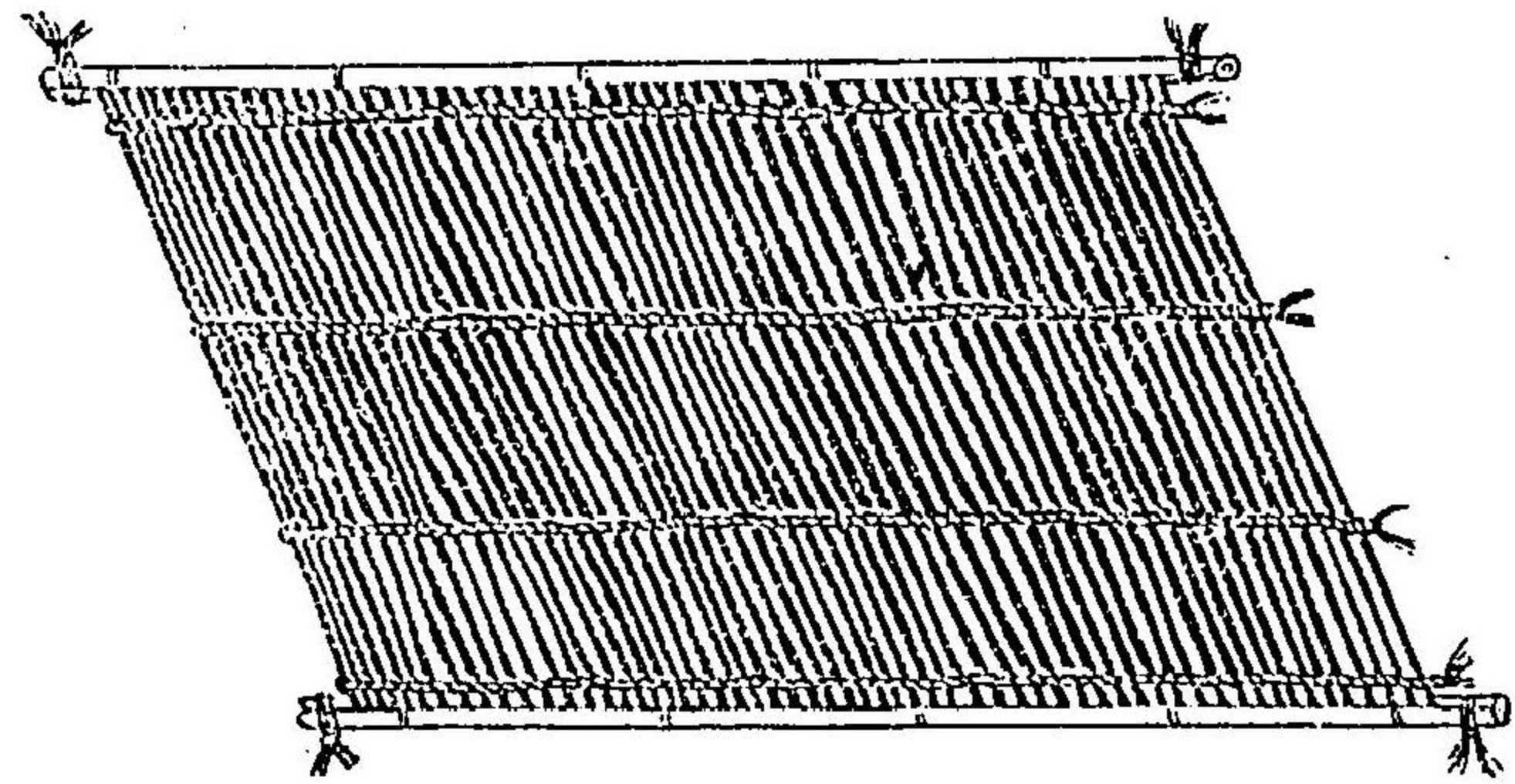
第十二圖



々土間ノ炭火面ヲ距ルコト高三尺位ノ所ヨリ數階ノ
 棚ヲ造リ置クヘシ即チ第二十圖ニ示スカ如シ此ノ
 如ク小屋出來上リタルトキハ更ニ第二十一圖ノ如
 キ籠數十枚ヲ造リ置クヲ要ス是レ椎茸ヲ炙ルノ用
 ニ供スルモノニシテあじろト稱シ繩ヲ以テ蓋ヲ編
 ミ兩縁ヲ竹若クハ木ニテ插ミタルモノナリ其大サ
 ハ長三尺幅二尺五寸位ヲ良トシ兩縁ヲ插ミタル竹
 若クハ木ノ兩端ヲ五寸位長カラシメ以テ持チ運ヒ

ニ便ナラシムヘシ

第十二圖



(注) あじろヲ造ルニハ蓋ヲ宜シトス若シ竹ヲ以テ
 造レハ熱ヲ傳導スルコト甚シキタメ椎茸焦ゲ
 易キ恐アレハナリ

然リ而シテ荷ヒ籠ニ入レテ椎茸ヲ上述ノ小屋内へ運ヒ
 込ミタルトキハ之ヲあじろノ上ニ列ヘテ棚ノ上ニ据ヘ
 下ヨリ炭火ヲ以テ乾燥スヘシ但シ椎茸ノ濕リ居ルモノ
 ハ先ツ棚ノ最上階ニ置キ少シク乾クヲ待テ第二階ニ移
 シ更ニ第三階ニ移シ終ニ最下階ニ至リテ炙リ止ムヘシ
 故ニ乾クニ從テ始終あじろヲ循環交代セシメサルヘカ
 ラス
 此方法ニヨルルハ晴雨ヲ論セス椎茸ヲ乾燥セシメ得ル
 ト雖モ椎茸ヲ採收シタルトキ其乾濕ノ度ニ應シテ巧ニ
 火力ノ強弱ヲ加減セサルヘカラス即チ採收シタル椎茸

適度ニ乾キ居ルモノナレハ其之ヲ乾燥スルコト容易ニシテ火力少シク強キニ失スルモ甚タシキ害アルヲ見スト雖モ若シ濕リタル椎茸ヲ乾燥スルニ於テ火力強キニ過クルアラシカバじめ互ニ相附着シ其色濃褐又ハ暗黒トナル如此キモノハ料理ニ用フルモ固クシテ食スルニ耐ヘス之ニ反シテ火力弱キニ失スレハ黒色トナリテ腐敗ス故ニ充分火力ノ強弱ヲ注意シ可成あじろ上ノ椎茸ヲ數回手返シスヘシ此方法ニヨリ乾燥シタル椎茸ノ品位上等ナルモノハ笠褐色バじめ山吹色ナレトモ劣等ノモノハバじめニ黒色ノ斑點アリ然リ而シテ乾燥シタル椎茸ノ重量ハ期節ニヨリ異ナルモノニシテ大概左ニ示スカ如シ

重量最多ナルモノハ

秋子ノ晩生

次ハ

春子ノ早生

次ハ

秋子ノ早生

次ハ

春子ノ晩生ナリ

上述ノ方法ニヨリテ乾燥シタル椎茸ハ當地方ニ於テ主ニ大阪ニ販賣ス其之ヲ送ルニ總テ五貫目入ヲ一たてト定ム即チどんこハたて紙十五枚ヲ以テ造リタル袋ニ入

レ薄葉ハたて紙十九枚ヲ以テ造リタル袋ニ入レ其上ニ筋繩ヲ掛ケ總計重量五貫百五十目トシ之ヲ麥藁製ノ藪ニテ包ミ送ルナリ
春子ハ前述ヘタルカ如ク虫生シ易キカ故ニ永ク貯藏セント欲セハ毎月一二回宛日光ニ干シ且三ヶ月目毎ニ一回宛火ヲ以テ乾スヘシ秋子ニハ虫生スルコト少ナシト雖モ是レ亦永ク貯藏センニハ一年間ニ四五回位宛日光ニ干シ置クヲ要ス

○第十二章 被害并其豫防法

其一 野火

野火ハ椎茸製造ニ際シ最モ恐ルヘキ災害ニシテ其殊ニ危險ナルヲ伐木後第二年目トシ次ヲ伐木ノ年次ヲ第三年目ナリトス蓋シ初年ニアリテハ未タぼたカ多量ノ水分ヲ含有シ第三年目ニ在テハ既ニ肉付居ルヲ以テ少シク野火ニ遇フモ全部盡ク椎茸發生力ヲ失フコト稀ナレトモ第二年目ニアリテハぼた最モ乾キ居ルカ故ニ容易ニ發生力ヲ失フヲ以テナリ

其二 寒風

春子ノ早生シタルモノニ寒風吹キ付ケルトキハ爲ニ凍縮シテ生長スルコト能ハス

然レトモ爾後降雨アレハ再ヒ生長ス

其三 霜

發生シタル椎茸カ霜ヲ受クレハ頭部黒色トナリ爲ニ品位ヲ損ス是レ屢々春子ノ早生及秋子ノ晩生ニ見ル所ナリ

其四 霖雨

降雨度ニ適スルハ頗ル望ムヘキコトナリト雖モ椎茸既ニ熱期ニ達シタルニ及ンテ霖雨連亘スレハ爲メニ腐敗シテ大ナル損失ヲ蒙ルヘシ

其五 暴風

椎茸ノ發生シタルトキ暴風アリテ一本ノぼた倒ルトキハ夫カ爲メ恰カモ將基倒シノ狀ヲナシテ他ノぼた順次倒レ遂ニ一牛中ノぼた悉皆ヲ倒シ盡ク椎茸ヲ害スルコトアリ故ニ暴風ノ兆アルトキハ豫メ竹又ハ小木ニ木宛ヲ以テ牛ノ兩側ヨリぼたヲ挾ミ結ヒ付ケ置クヲ良トス

其六 猿

猿ハ獸類中最モ有害ナルモノニシテ椎茸ノ發生シタル時番人ノ慮ニ乘シ群ヲナシ

テぼた場ノ周圍ニ來リ其中ノ一匹先ツぼた場ニ入り込ミテ普ク番夫ノ存否ヲ檢シ了リテ「ビイ〜」ト呼フトキハ一群直ニ侵入シ來リテ椎茸ノ頭部ノミヲ食シ飽クニ及ンテ前脚ヲ舉テぼたニ殘存セル椎茸ヲ盡ク搔キ落シ置キテ去ル故ニ一回猿ノ襲來ニ遇ヘハ非常ノ損失ヲ蒙ルナリ但シ主ニぼたノ表面ニ生セル椎茸ヲ害スルモノニシテ其裏面ニ生スルモノハ此害ヲ免ルコト多シ

其七 にく

にくトハ鹿大ノ四足獸ニシテ岩山ニ棲息シ主ニ志い、志らかし等ノ長木ぼたヲ害ス此モノハ猿ノ如ク一度ニ椎茸ヲ皆盡スルコトナキモ屢々襲來スルモノナリ是レ亦ぼたノ裏面ニアル椎茸ヲ害セス

其八 鹿

椎茸ヲ害スルモノハ主ニ唯ニシテ其害狀前者ト同シにく并鹿ヲ豫防センニハぼた場ノ周圍ニ繩ヲ張り之ニ鈎屑、ぶりき、罐等ヲ附着シ置ケハ彼レ恐レテ來ルコトナシ

其九 きつゝき

ぼたニ生スル虫類ヲ食セントシテ孔ヲ穿チ皮部ヲ害ス

其十 かじどり

嚙ニテ椎茸ヲ取り他所ニ持ち去ルノ害アリ然レモ前者ト共ニ被害ノ度著シカラス

其十一 とびむし

春期晩生シタル椎茸并秋期早生シタルモノ、ござめ中ニ往々無數ノ小虫寄生スルコトアリ俗ニ之ヲとびむしト稱ス如此キ椎茸ハ直チニ採收シ火力ヲ以テ乾燥スヘシ然レトモござめ切レトナリテ其色汚染シ品位頗ル劣等トナル

其十二 なめくじ

椎茸ノ小ナルモノニアリテハ頭部ヨリ食ヒ大ナルモノニアリテハ先ツござめヲ食シ遂ニ表面迄小孔ヲ食ヒ通スニ至ル害アリ

其十三 かたつむり

前者ト同一ノ害アレトモ此兩者ハ被害ノ度顯著ナラス

○第十三章 收支決算

總テ事業ノ損益如何ヲ判定スルハ收入ト支出トノ差ニヨルモノニシテ椎茸製造業

ニ於テモ亦此レカ如何ヲ檢スルハ頗ル緊要ナリ今左ニ古來慣用セル一種ノ算定法ヲ述ヘン

(伐木費) ならノ伐木量ハ一人一日ニ凡五十荷トス蓋シ一人一日ニ伐木セルモノハ

四年目ニ至リ椎茸寄生セサリシぼたヲ除キ寄生シタルモノ、ミ五十荷ヲ出ス

ニ足ルト云フ意味ニシテ一荷トハ前陳ノ如ク重量十二貫目ヲ稱ス然レモ場所

ノ難易ニヨリ固ヨリ伐木量ニ多少ノ差アルヲ免レ難シ

志でハならニ比スレハ椎茸ヲ寄生セシムルコト困難ナルカ故ニ一人一日ニ伐

木シタルモノハ果シテ何荷ノぼたヲ出シ得ルヤ明了ナラスト雖モ平均三十五

荷位ト見做セハ蓋シ大差ナカルヘシ

(刻ミ并寢セ込ミ費) ならニアリテハ一人一日ニ伐木シタルモノヲ刻ミ且寢セ込ム

ニ凡ソ三人手間ヲ要ス

志でニアリテハ一人一日ニ伐木シタルモノヲ刻ミ且寢セ込ムニ凡二人手間ヲ

要ス

(ぼた寄セ費) 寄セ込ミ場ノ便否ニヨリテ差アレトモ平均一人一日二十荷ノぼたヲ

寄セ込ムコトヲ得

(ぼたさばき費) 古ヨリ該ニ

椎茸一荷採リ一人付キ

ト云フ此意味ハ椎茸一荷(即チ十貫目)ヲ生スル丈ケノぼた即チ三百荷ヲさばき而シテ春子ヲ採リ干シ終ル迄總テ一人ニテ爲スモノトシ凡ソ三十人手間ヲ要スト云フニ在リ然レトモ近來木干シ若クハ室干シ法行ハル、ニヨリ一人ニテ能ク一荷ノ椎茸ヲ採ルコトヲ得

(秋子製造費) 秋子モ亦古來一荷採リ一人付ト云ヘリ即チぼたヲ打ッヨリ初メ干シ

終ルニ至ル迄終始一人ニテ爲スニ二十五六人手間ヲ要スト云フ意味ナリ然レトモ是レ亦近來一人ニテ能ク一荷半ノ椎茸ヲ採ルコトヲ得ルナリ

以上ハ伐木ノ年ヨリ起算シ四年目ノ終リニ至ル迄ノ諸費用ナルカ故ニ之レニ山代金(即チ木代)ヲ加ヘタルモノト春子并秋子ノ收額トヲ比較シ以テ損益如何ヲトスルモノニシテ二歲ぼた以上ノ收入ニ至リテハ單ニ設計外ノ利益ト見做シ毫モ計算ニ加ヘサルヲ常トセリ

今左ニ普通行ハル、計算法ノ一例ヲ掲ケン

- 一金拾圓 是ハ本例ニ於テ三年ノ後ぼた三百荷ヲ得ル所ノ椎茸原木代金
- 一金貳圓 是ハ全上原木ヲ代採スル人夫賃ニシテ一日ノ賃錢貳拾五錢ノモノ八人手間ヲ要ス
- 一金四圓八拾錢 是ハ刻ミ及腰セ込ミ費ニシテ一人一日ノ賃錢貳拾錢ノモノ二十四人手間ヲ要ス
- 一金六圓 是ハぼた寄セ費ニシテ伐木後三年目ノ終リニ於テ椎茸ノ發生シタルぼた三百荷ヲ一人一日十荷寄セトシ其賃錢一日貳拾錢ノモノ三十人手間ヲ要ス
- 一金六圓 是ハぼたさばきヨリ春子ヲ採リ干シ終ル迄ノ費用ニシテ一日一人ノ賃錢貳拾錢ノモノ三十人手間ヲ要ス
- 一金五圓 是ハ秋子製造費ニシテ一日一人ノ賃錢貳拾錢ノモノ貳拾五人手間ヲ要ス

支出合計金三拾三圓八拾錢

收入ハ春子一荷并ニ秋子一荷ヲ收穫シタリトシ春子一荷ノ價ヲ貳拾圓秋子一荷ノ價ヲ貳拾五圓トシ其收入合計ハ左ノ如シ

收入合計金四拾五圓

今總收入四拾五圓ヨリ總支出三拾三圓八拾錢ヲ減スレハ即チ本例ニ於テ金拾壹圓貳拾錢ノ純利アリタルモノナリ

又當地方ニ於テぼたノ儘賣買スルコトアリ其價格ハ固ヨリ椎茸ノ市價異ナルニ從

テ變スレトモ椎茸一荷ノ價貳拾五圓位ナルトキハ大略左ノ如シ

- 一歳ぼた百荷ノ價 凡拾圓
- 二歳ぼた百荷ノ價 凡貳圓
- 三歳ぼた百荷ノ價 凡貳拾錢

上述ノ計算ハ只從來ノ慣習法ニ止マルモノニシテ元ヨリ正確ナルモノニアラス何トナレハ椎茸製造事業ノ如キハ四年目ニ至リ始メテ第一回ノ收利ヲ見ルモノニシテ其間常ニ年ヲ追フテ資金ヲ投入スルノミナレハナリ豈ニ之ニ利子ヲ付スルナクシテ可ナランヤ又二歳ぼた、三歳ぼたカ發生スル所ノ椎茸ハ其量元トヨリ一歳ぼたニ比シ尠少ナルハ勿論ナレトモ是レ蓋シ收入ナリ初メヨリ投入シタル資本ノ生産物タリ何ソ之ヲ計算ニ加ヘスシテ單ニ設計外ノ收利トシ漫ニ輕視スルヲ得ヘケンヤ要スルニ如斯基計算法ヲ墨守シテ徒ニ改良スルナクンハ到底事業ノ損益如何ヲシテ判然タラシムルコト能ハサルノミナラス之カ基礎ヲ鞏固ナラシメ以テ椎茸製造事業ヲシテ益々盛大ノ運ニ達セシムルコト能ハサルナリ然ラハ之ヲ措テ他ニ如何ナル良法カアル蓋シ左ニ説述スル所ノモノヲ以テセハ庶クハ夫レ過ナキニ幾カ

ラン乎

今椎茸木ヲ伐採スル年ヨリ起算シテぼたカ全ク椎茸ヲ發生セサルニ至ル迄ノ年數ヲn年トシ、元金ニ對スル利率ヲ年利p朱トス

支 出 之 部

初年ニ於テハ木代(之ヲBト記ス)伐木費(Aトス)刻ミ并寢セ込ミ費(Sトス)ノ三者ヲ要スルモノニシテ此等ニ對シn年間ノ重利ヲ付セサルヘカラス即チ其n年末ニ於ケル元利總計ハ

$$(B+A+S) \left(1 + \frac{p}{100}\right)^n = (B+A+S) 1.0p^n \dots \dots \dots (1)$$

第三年ニ於テハ寄セ込ミ費(Zトス)ヲ要スルモノニシテ之ニ(n-2)年間ノ重利ヲ付セサルヘカラス即其n年末ニ於ケル元利總計ハ

$$Z \cdot 1.0p^{(n-2)} \dots \dots \dots (2)$$

第四年ニ於テハ春子并秋子製造費(兩者ヲ示スニG₁ヲ以テス)ヲ要ス此兩者ニハ(n-3)年間ノ重利ヲ付スヘキカ故ニn年末ニ於ケル元利總計ハ

$$G_1 \cdot 1.0p^{(n-3)} \dots \dots \dots (3)$$

第五年ニ於ケル春子并秋子製造費 G_5 トスニハ一年間ノ重利ヲ付スルヲ要ス故ニ其 n 年末ニ於ケル元利計ハ

$$G_5 \cdot 1.0p^{(n-3)} \dots \dots \dots (4)$$

第 n 年ニ於ケル春子并秋子製造費 G_n トスニハ更ニ利子ヲ付スルヲ要セス

$$G_n \dots \dots \dots (5)$$

今(1)ヨリ(5)迄ヲ加算スレハ

$$(1) + (2) + (3) + (4) + (5) = (B+A+S)1.9p + Z \cdot 1.0p^{(n-2)} +,$$

$$G_4 \cdot 1.0p^{(n-2)} + G_5 \cdot 1.0p^{(n-1)} \dots \dots \dots + G_n \dots \dots \dots (甲)$$

ニシテ即チ總支出ノ n 年末ニ於ケル元利合計ヲ得ルナリ

收入之部

第四年ノ春秋兩期ニ於ケル椎茸製造額ヲ E_4 トスレハ之ニ $(n-3)$ 年間ノ重利ヲ付スルヲ要ス故ニ n 年末ノ元利總計ハ

$$E_4 \cdot 1.0p^{(n-3)} \dots \dots \dots (5)$$

第五年ノ椎茸收額ヲ E_5 トシ之ニ $(n-4)$ 年間ノ重利ヲ付スレハ其 n 年末ニ於ケル元利

ハ

$$E_5 \cdot 1.0p^{(n-4)} \dots \dots \dots (7)$$

第 n 年ノ收額之ヲ E_n トスニハ利子ヲ付スルヲ要セス

$$E_n \dots \dots \dots (8)$$

今(6)ヨリ(8)迄ヲ加フレハ左ノ如シ

$$(6) + (7) + (8) = E_4 \cdot 1.0p^{(n-3)} + E_5 \cdot 1.0p^{(n-4)} + \dots \dots \dots + E_n \dots \dots \dots (乙)$$

是レ則チ總收入ノ n 年末ニ於ケル元利合計ナリ

故ニ收入ノ元利合計(乙)ト支出ノ元利合計(甲)トヲ比較シ乙カ甲ニ超過スルノ多少ヲ以テ該事業利益ノ度ヲ確定シ得ルナリ其式ハ次ノ如シ

$$\text{総利} = (E_4 \cdot 1.0p^{(n-3)} + E_5 \cdot 1.0p^{(n-4)} + \dots \dots \dots + E_n) -,$$

$$\{ (B+A+S)1.0p^n + Z \cdot 1.0p^{(n-2)} + G_4 \cdot 1.0p^{(n-2)} +,$$

$$G_5 \cdot 1.0p^{(n-1)} + \dots \dots \dots + G_n \}$$

明治廿八年三月十五日印刷
明治廿八年三月十八日發行

定價金拾錢

編纂者

佐藤 振五郎

三重縣桑名郡長島村大字松ヶ島十七番屋敷

發行者

內田 信一郎

東京市赤坂區溜池町一番地

發行所

大日本山林會

東京市日本橋區兜町二番地

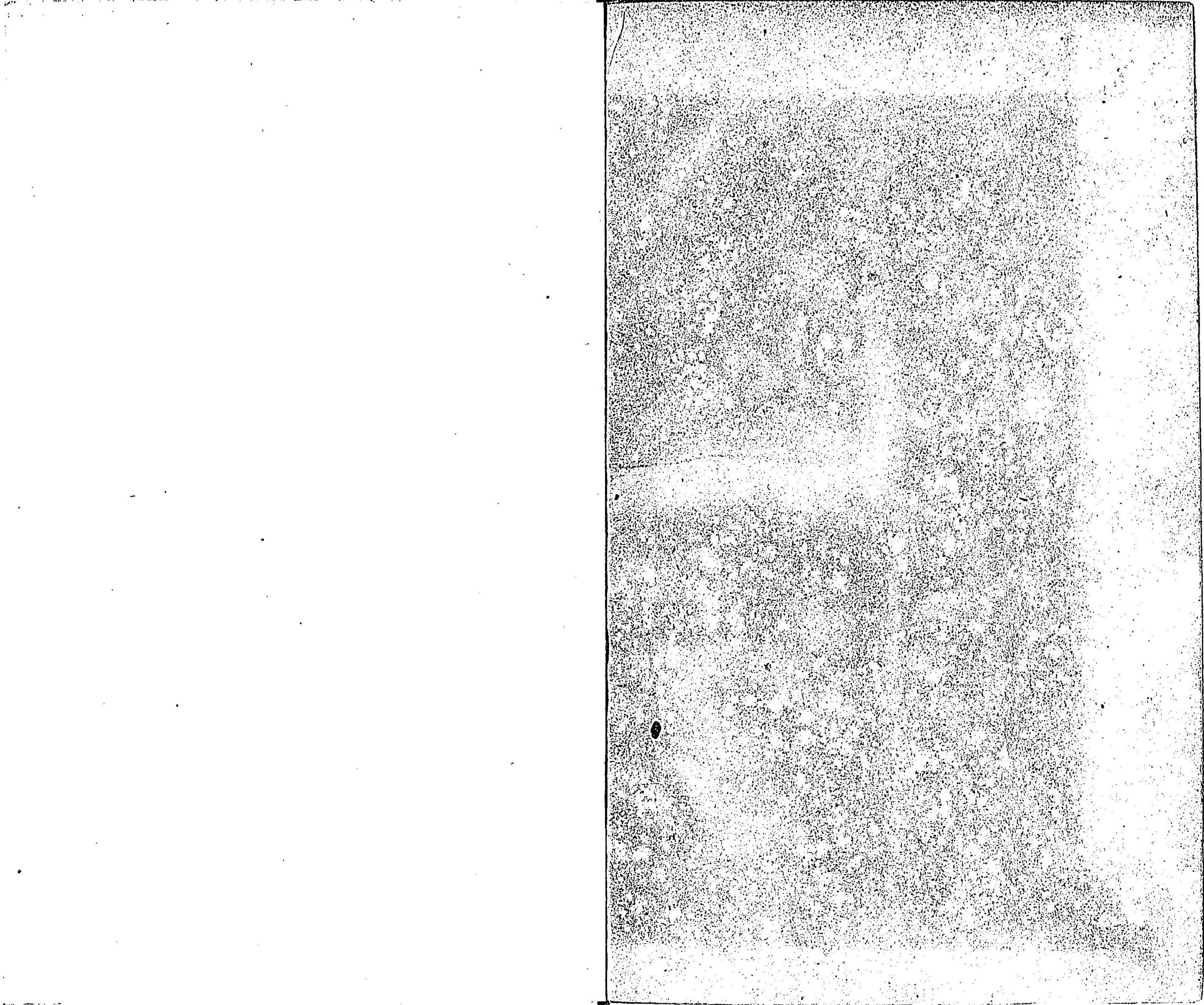
印刷者

高橋 金四郎

東京市日本橋區兜町二番地

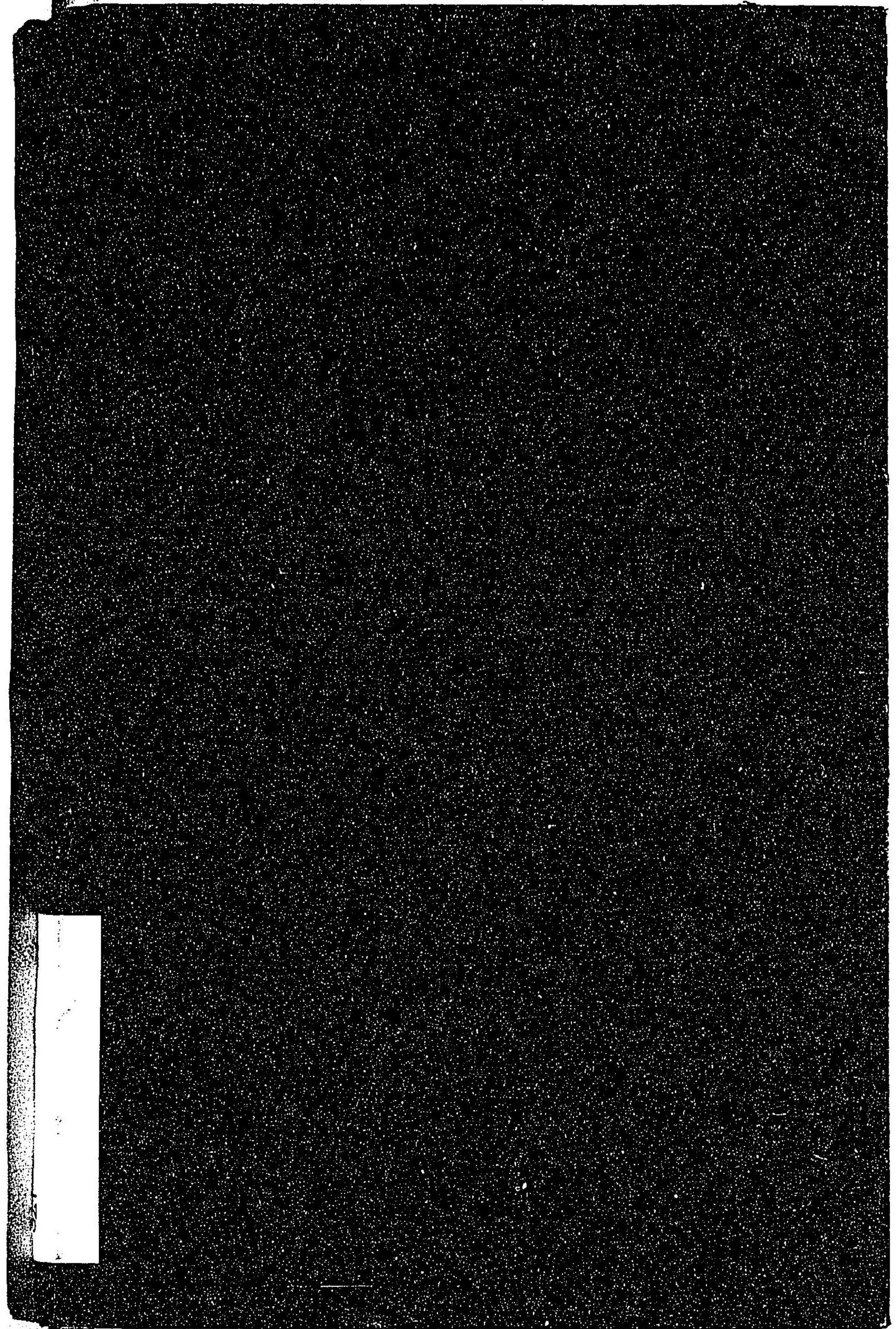
印刷所

東京製紙分社



40

170



1
2
3
4

40

170

三重縣
多喜郡
椎茸製造法

065366-000-1

40-170

三重縣多喜郡椎茸製造法

佐藤 銀五郎 / 著

M28.3

CCE-0215

